

採 蓮

Siren

第
二
二
号

No.22

石井林響《唐獅子牡丹図屏風》部分



資料紹介 石井林響をめぐる書簡など (翻刻と解題)

松尾 知子

石井林響(一八八四〜一九三〇)は、千葉県山辺郡土気本郷町(現千葉市)に生まれ、明治末に若くして画壇に登場、昭和初めにかけて活躍した日本画家である。本稿は、二〇一八年十一月二十三日から二〇一九年一月十四日にかけて開催した展覧会「生誕一三五年 石井林響 千葉に出づる風雲児」の補遺として、展覧会でも一部は紹介した、石井林響から相原寛太郎(一八七五〜一九四五)号沐芳)宛の書簡及び相原が関わった画会の資料(新井旅館蔵)と、初紹介の安田鞞彦(一八八四〜一九七八)から石井林響宛書簡(千葉市美術館蔵)を翻刻し、若干の解説を加え、明治末から昭和初めの林響をめぐる動向を紹介しようとするものである。

相原沐芳は明治五年創業の修善寺温泉「養氣館新井」の三代目館主となり多くの文人・画家たちと親交したが、林響とも、結婚の仲人も務めるなど若き日

千葉市美術館所蔵 石井林響関係資料のうち書簡リスト

掲載番号	図版掲載	文中日付	西暦	形状	宛先	差出人名 (内は文中での差出人名)	内容等
①	図①	明治43年4月27日付	1910	巻紙に墨書、封筒	東京府下南品川五五七 茂野様御内 石井天風様	沼津にて 安田鞞彦(新三郎)	切手剥落、消印読めず
②	図②	(年不明)2月19日付	1920?	巻紙に墨書、封筒	東京市外南品川五五七 石井林響様	相州大磯山手 安田鞞彦	
③	図③	大正13年12月9日付	1924	巻紙に墨書、封筒	東京市外南品川五五七 石井林響様	相州大磯山手 安田鞞彦	
④	図④	昭和4年4月30日付 (年不明) 12月6日付	1929	巻紙に墨書、封筒 便箋に墨書、角封筒	石井林響様 御令正様 (二代目伊三郎様 東の石井さん)	大磯にて 安田鞞彦 石井林響 (西の石井)	「十二月六日 今夕一寸出かけるのに○印無し、銀行は日曜で休みイヤハヤ、処 で聖徳太子と観音さんの分を頂ければ大助かりです。但しお仕 事代を差引いて…、御都合で半分でもよいのです。 東の石井さん、 西の石井」

	図⑤	(年月日不明)		官製はがき、ペン書	(宛名なし、書き損じ)	(石井林響)	「ご」無沙汰致しております、今朝白鵬の愛らしい子が三羽産まれました、四年越しで初めて見たのですから喜んで居ります、先日は十年ぶりで「花の咲かぬ牡丹と子供達は極めていた」見た小庭の牡丹が近所の少年それとも尋常四年にもなるというのにむさむさむしり取って・・・(挿絵あり)
	図⑥	(年月日不明)		官製はがき、墨書	(宛名なし)	(石井林響)	「美術創刊 萬々歳(挿絵あり)」
	図⑦	昭和4年4月30日付	1929	印刷物、角封筒	千葉県大網町宮谷 石井林響殿	梨本宮附宮内事務官 三雲敬一郎	5月9日、梨本宮守正王の茶会招待状「謹啓 守正王殿下来五月九日茶会御催被遊候同日午後二時御参邸相成度依命此段申進候 敬具」(裏に付箋)「御著服 フロックコート モーニングコート又ハ紋付羽織袴」
		(年不明) 7月23日付		便箋にペン書、封筒	石井きん子様	本郷区電町 橋本秀邦	(郵便でない) 使に持たせ印章を返却
		昭和32年9月29日付	1957	便箋5枚に墨書、封筒	品川区南品川一ノ二七五 石井黙然様	伊東深水	白木屋における林響遺墨展の慰労と、その後林響の絵をねだり受けたが永く愛蔵する、との御礼。

新井旅館所蔵 石井林響関係 書簡等文書リスト (推定含む日付順)

掲載番号	本稿に掲載の図版	日付	西暦	形状	宛先	差出人名 (内は文での差出人名)	備考	「生誕135年 石井林響展 図録掲載」 新井旅館の 文書番号
1	図1	明治41年4月14日付	1908	巻紙に墨書、封筒	東京日本橋区通巷丁め 旅館松葉や 相原貫太郎様	伊豆修善寺 石井天風		石井天風1
2		明治41年4月20日付	1908	巻紙に墨書、封筒	東京日本橋通一丁目 松葉や様内 相原寛太郎様	石井天風		石井天風2
3	図3	明治41年4月26日付	1908	巻紙に墨書、封筒	東京日本橋区通巷丁め 松葉や 相原寛太郎殿	伊豆修善寺 石井天風		石井天風3
4	図4	明治43年4月25日消印	1910	絵はがき、赤インクペン書	伊豆国修善寺温泉 新井天城様	(天風) 東京南品川五五七 石井毅	(消印) 京橋	石井天風4
5	図5	明治44年3月27日付	1911	巻紙、墨書、封筒	伊豆国修善寺温泉 新井天城様	南品川 石井天風	「本日女子分婉母子とも健康」との知らせ	石井天風5
		(年不明) 3月25日付	1911	官製はがき、墨書	伊豆国修善寺温泉 相原天城様	南品川 石井毅	お祝いへの御礼「暢子」と名付ける	石井天風8
		明治44年6月13日付	1911	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 新井天城様	南品川 石井天風	延引を詫び、いよいよ参館することの知らせ	石井天風9
6		明治44年7月2日付	1911	官製はがき、ペン書	伊豆国修善寺温泉 新井天城様	南品川五五七 石井天風		石井天風10
7		明治44年8月1日付	1911	巻紙に墨書(追而書別紙、封筒)	伊豆国田方郡修善寺 相原天城様	南品川五五七 石井天風	(郵便ではない)	石井天風11
8		(年不明) 8月30日付	1911	巻紙にペン書、封筒	養氣館 相原天城様	南品川五五七 石井天風		石井天風12
9		明治44年9月9日消印	1911	官製はがき、ペン書	伊豆国修善寺温泉 新井天城様	南品川五五七 石井天風		石井天風13
10		明治44年9月30日消印	1911	官製はがき、ペン書	伊豆国田方郡修善寺温泉 新井天城様	南品川五五七 石井天風		石井天風14
11		明治44年10月1日付	1911	官製はがき、墨書	伊豆国修善寺温泉 新井天城様	南品川五五七 石井天風		石井天風16
天風会の 発会	「天風會々規」	明治44年10月5日付	1911	印刷物1枚	伊豆国修善寺温泉 新井天城様	石井天風		石井天風14
12		明治44年11月3日付	1911	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 新井天城様			石井天風15
天風会礼 状	天風会礼状	明治44年11月付 (11月12日消印)	1911	印刷物1枚、封筒	伊豆修善寺 新井天城様	石井天風		石井天風16
13		明治45年1月27日付	1912	官製はがき、墨書	伊豆国修善寺温泉 新井天城様	南品川五五七 石井毅		石井天風17

14	明治45年2月28日付	1912	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 相原天城様	南品川五五七	石井天風		石井天風―18
15	明治45年4月11日付	1912	官製はがき、墨書	伊豆国修善寺 新井天城様	南品川五五七	石井天風		石井天風―19
16	明治45年4月23日付	1912	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 新井天城様	南品川五五七	石井天風		石井天風―20
17	明治45年4月28日付	1912	絵はがき、墨書	伊豆国修善寺 新井天城様	南品川五五七	石井天風		石井天風―21
18	明治45年5月3日付	1912	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 温泉 新井天城様	南品川五五七	石井天風		石井天風―22
19	明治45年7月7日付	1912	官製はがき、墨書	伊豆国修善寺 温泉 相原天城先生	南品川五五七	石井天風		石井天風―23
20	明治45年7月16日付	1912	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 新井天城様	南品川五五七	石井天風		石井天風―24
21	明治45年7月25日付	1912	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 相原天城様	南品川五五七	石井天風		石井天風―25
22	大正元年8月23日付	1912	官製はがき、墨書	伊豆国修善寺 温泉 新井天城様	石井天風			石井天風―26
23	大正元年9月20日付	1912	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 相原天城様	石井天風			石井天風―27
24	大正元年11月10日付	1912	官製はがき、墨書	伊豆国修善寺 相原天城様	石井天風			石井天風―28
	大正元年11月12日付	1912	(印刷) 巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 相原天城様	石井天風			石井天風―29
	大正元年12月6日付	1912	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 相原天城様	石井天風			石井天風―30
25	大正2年3月11日付	1913	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 温泉 相原天城様	南品川五五七	石井天風		石井天風―31
26	大正2年4月11日付	1913	官製はがき、墨書	伊豆国修善寺 温泉 相原天城様	南品川五五七	石井天風		石井天風―32
27	大正2年4月21日付	1913	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 相原天城様	南品川五五七	石井天風		石井天風―33
	大正2年5月15日付	1913	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 新井天城様	南品川五五七	石井天風		石井天風―34
	大正3年1月1日付	1914	年賀はがき(印刷)	伊豆国修善寺 相原天城様	東京南品川五百五十七番地 石井天風			石井天風―35
28	大正4年4月20日付	1915	巻紙に墨書、封筒	伊豆国修善寺 相原天城様	南品川五五七	石井天風		石井天風―36
天風後素会の発云	大正4年2月付	1915	印刷物1枚					石井天風―16
天風後素会案内状	大正4年5月10日付	1915	(印刷・角封筒)					石井天風―17
29	大正12年9月7日消印	1923	官製はがき、ペン書	伊豆国田方郡修善寺 相原寛太郎様	南品川五五七	石井林響		石井天風―40
30	大正12年9月19日付	1923	官製往復はがき(返送用、ペン書)	静岡県田方郡修善寺 相原寛太郎様	「東京南品川五五七／石井林響」(住所印)			石井天風―41
31	大正14年3月15日付	1925	官製はがき、墨書	伊豆国修善寺 温泉 相原沐芳様	南品川五五七	石井生		石井天風―42
32	大正14年4月16日付	1925	巻紙、墨書、封筒	伊豆国修善寺 相原沐芳様	南品川五五七	石井林響		石井天風―6
33	大正14年5月11日付	1925	巻紙、墨書、封筒	伊豆国修善寺 養氣館 相原沐芳様	東京南品川 石井林響(殺三郎)			石井天風―7
34	(年不明 大正15年か) 8月4日付	(1926)	巻紙、墨書、封筒	伊豆国修善寺 相原沐芳様	「千葉県大網町宮谷郷 白閑亭」(角印) 石井林響			石井天風―43
35	昭和5年2月24日付	1930	官製はがき、墨書	伊豆修善寺 相原寛太郎様	千葉県大網町宮谷 石井きん			石井天風―44
訃報	昭和5年2月25日付	1930	印刷、角封筒	伊豆国修善寺町温泉 相原寛太郎様				石井天風―45
七七日忌挨拶状	昭和5年4月14日付	1930	巻紙に印刷、封筒	伊豆国修善寺新井 相原寛太郎様	千葉県大網町宮谷 石井きん子			石井天風―45

安田鞆彦の書簡 石井林響宛
(千葉市美術館蔵／石井林響関係資料・石井淳氏寄贈)

①明治四十三年四月二十七日付

落花の春愁風趣

深く惠風和暢一

年の好期に御坐候、

御葉書有難拜見、又

癩疽に就き御懇切

なる御注意奉深謝候、

以御庇最早懸念も

不要、不日快癒の筈に

御坐候、當地方御光

臨の事、俄に御差支

を生じ候由、遺憾此事

に候、御好都合に相成候

はゞ是非共御令聞御

全道にて御出馬の程

待入候、東京画會に

巡覧の由、御高話も

承度候、大觀氏の作

名古屋出品のと殆全

工のものらしく近來か、

る装飾或花鳥を試みら

如く

る、むしろ新味大い掬す

へく候、

今回愈々紅兒會御入會の由、慶

賀に不堪、向後全會の

為に御努力玉はり度切

いすれ

望に不堪所に御坐候、拝

芝の際は萬々御物語致度

候、

前田君も折々見へられ候、

過日も渡辺蜜健次君の令

弟高鳳君の會三寫に有

之、前田君も出席大に

毫を揮はれ候、小生も天

城氏、雪橋氏と共に參觀

大に一昨年の三寫を回

想致候、

前田君も小生の知れる限

にては大に神妙の体に候、

但鬱勃たる英氣抑へ

難き状看取するに難か

らず候、

天城氏は新に可愛いのを

もらはれ、相原家の家連萬

歳に候、

須田氏、村田氏變りなく村田

氏は一寸上京、昨日歸られ候、

別段格別の珍談も無之

依例如例に御坐候、江戸

表の珍話鶴首待居候、

御母堂御令聞又梅吉氏

にもよろしく御傳声申

下度願上候、忽々不一

四月廿七日 新三郎

天風大兄

榻下

(封筒裏)

東京府下南品川五五七

茂野様御内

石井天風様

親展

(封筒裏)

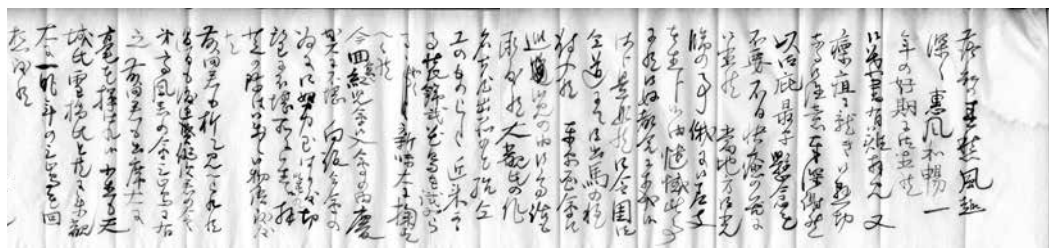
沼津にて

四月廿七日

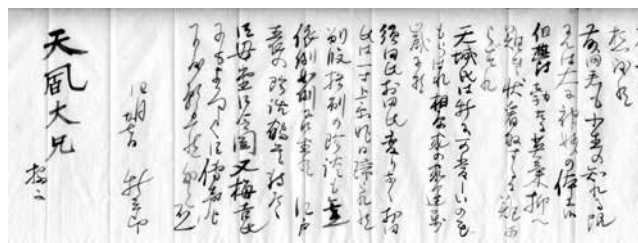
安田鞆彦

四月二十七日付、安田鞆彦(鞆彦)の書簡である。消印から明治四十三年と判明。五ヶ月違いの同い年であつた安田鞆彦と石井林響は、このとき満年齢で鞆彦二十六歳、林響二十五歳である。鞆彦は明治四十二年晩秋、修善寺から沼津に移住していた。一方、林響は四十二年に三河島の画房が焼失し、南品川の茂野梅吉方に転居していた。

この書簡は、沼津で静養中の安田鞆彦が、癩疽(指先のうむ病氣)にかかり、心配する林響の葉書に對して返信したもの。林響は沼津を訪ねる予定でもあつたが、急に都合が悪くなつたことが伝えられていたようだ。当地に来られる際は是非ご令聞と共に



四
①



と靱彦は述べ（林響が茂野きんととの婚姻届を提出したのは四十四年一月とされる）、家族皆知己であった。

本書簡で注目されるのは、林響がこのたび紅児会に参加することになったことを期待を込めて語っているところである。この年の秋、林響は第十二回紅児会展に《玉の井》を出品したことが確認できる。他に、横山大観の新作や、前田青邨らの動向についても語られている。

②二月十九日付
(大正九年カ)

拜啓

其後は御無沙汰致
居候處、御手紙たまは
り、皆々様御健かの由
大慶此事に存
上候、小生舊臘より風
邪永ひき候へともさし
たることもなく過ぎ居候
處、先月末發熱
いたし以来臥牀致
居候、頃日快方には
相成居候、
高谷氏の繪延引
申譯無く御迷惑
恐縮致候、遠から

す着手致すべく候
間、不悪御致聲
たまはり度候、

の御入手の由、拝見致
度存居候、小生方は
以来格別の収獲無
之候、断片的のもの二三

其うち御覽願度候、
横須賀小佐野氏よ
りも実は先比書状
参り居候へとも御同様

差控居候、同氏も一昨年盡く蔵幅焼亡にて寂しがり居られ候間何卒御一拝被下度願上候、

先は御返事旁
要々まで牀中乱
筆御免被下度候、
御令正様へ宜敷
願上候、 頓首

二月十九日

韞彦

林響様

(封筒表)

東京市外南品川五五七

石井林響様

(封筒裏)

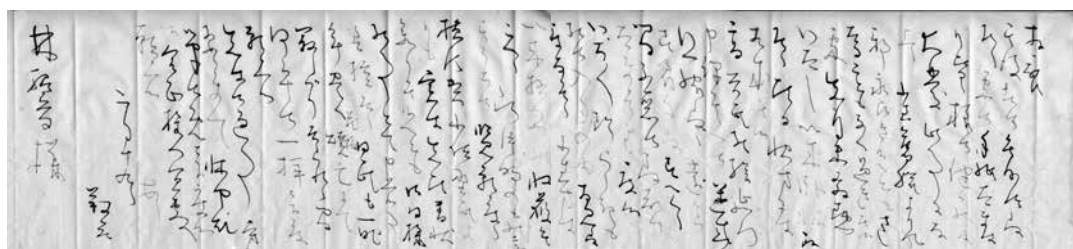
相州大磯山手 安田鞆彦

二月十九日

* * *

年紀がないが、「林響様」とあり、石井林響が改号した大正八年(一九一九)以降の書簡である。鞆彦は大正三年に大磯山手御嶽神社前に転居していたが、関東大震災で住居全壊してしまう。また、大正九年一月から二月にかけ肺炎で臥床しているので、「先月末發熱いたし以来臥牀致」とある本書簡は、その年のものか。林響の手紙に対する返信である。鞆彦の筆跡は、①からかなり変化をみせ、仮名文字が多く、良寛風の書風となっている。「高谷氏」より依頼の絵の制作が遅れていることを詫びている。林響の紹介でもあつたものか、近いうちに着手すると述べている。

本書簡で注目したいのは、「いろ／＼珍らしきもの御入手の由」とあることで、この頃林響は、古書画を色々と購入していたらしい。鞆彦も、收穫は「断片的のもの二三」といいながら、同じく何かよきものを求めて、互いに意識しあう仲であることがうかがえる。「横須賀小佐野氏」も同好の士らしく、一昨年火災で蔵幅を失って寂しがつているので、見せてやつて欲しいとも言っている。



図②

③大正十三年十二月九日付

拝啓

其後は御無沙汰にうち過ぎ候うち、もはや冬に相成候、皆々

様御機嫌よくおはし候や伺上候、

先日は帝展の招待券御惠贈下され

難有拝受致候、當時いろこた／＼致、その為御

礼延引いたし、帝展も終りて御手紙さ

し上げ候仕義御ゆるし被下度候、

一寸承れば玉堂名品近日御入手の由

其うち拝見をたのしみ居候、

新年には當地へも御来游たまはり度

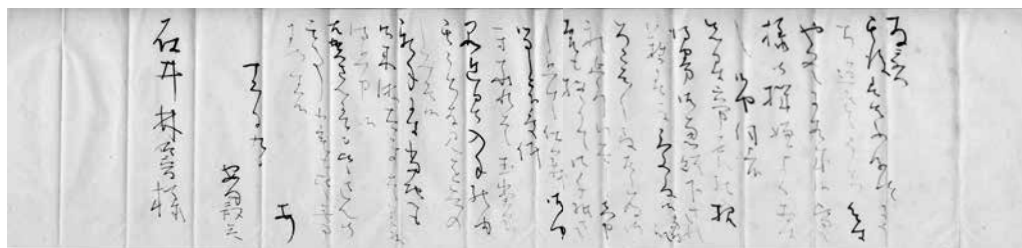
待上申候、

古賀さんにてても皆さん御無事、小宅も皆無事

に御坐候 頓首

十二月九日

安田鞆彦



図③

石井林響様

(封筒表)

東京市外南品川五五七

石井林響様 御下へ

(封筒裏)

相州大磯山手 安田鞆彦

十二月九日

* * *

林響は鞆彦に帝展の招待券を贈ったらしい。しかしいろいろごたごたしているうちに、終了してしまったからの御礼になってしまったことをわびている。林響は大正十一年の帝展で《林の中》を出品し、推薦となっていた。大正十二年九月の関東大震災を経て、この大正十三年の四月には林響は帝展の展覧会委員となった。ただし、自身はこの年の帝展には「都合により出品を見合わせた」と報じられており(読売新聞十月七日)、出品していない。

本状で注目されるのは、林響が浦上玉堂の名品を近日入手するということを鞆彦が耳にしており、そのうち拝見できることを楽しみにしているという文面である。林響の古書画の所蔵とその見識が知られており、玉堂についても既知のこととのニュアンスが感じられる。

林響は、大正十五年六月の『アトリエ』二一六

「名作短解」において、玉堂画の愛蔵について「時々取り出して鑑賞する事によつて私はどんなに励まされ、力づけられて居るか知れない」と解説している。大正半ば頃には、玉堂に注目する人として、一目置かれる存在であったと思われる。

林響がかの石濤の《黄山八勝画冊》(泉屋博古館蔵、重要文化財)を苦心して入手したのは大正十四年三月。このとき歳幅の売却などとして資金を作ったようだ。年代不明十一月一日付の書簡(生誕135年石井林響展「出品番号103」)にて所蔵の玉堂画を三points売ろうとしたのが、この頃の事とも想定される。一方で、石濤画冊入手の前年末の本書簡で近日入手とされている玉堂名品とはいかなる作品であつたのだろうか。

④昭和四年四月三十日付

拝啓

其後御主人様御経過如何におはしませ候や、御案申上候、先般新聞にて承知いたし恐愕致候、御経過よろしき由、御返電頂き引續き二三知友より御様子承り、やゝ意を強ふ

四月三十日

安田鞆彦

石井林響様

御令正様

乍末皆々様へよろしく御致聲被下度候

(封筒表)

石井林響様

御令正様

御許

(封筒裏)

大磯にて

安田鞆彦

四月三十日

* * *

林響は、昭和四年三月二十四日、脳出血症で倒れ、一時危篤状態となるが、一命をとりとめ快方に向かつていた。この書状は、新聞でその報に触れ驚愕した鞆彦が、林響の妻に宛てて差し出したものである。無事の旨は返電されており、二、三の知友より様子を聞いていたので意を強くはしていたものの、大病なので案じているという。見舞いにも行けないので、とりあえず古賀さんにこの手紙を托すといい、確かにこの封筒には郵便の痕はない。

昨年(昭和三年)秋に、帝展の会場で久々に二人は

会ったという。その帝展には林響は出品しておらず、その前の昭和二年の第八回帝展に《野趣二題》を出品し、話題を集め、帝展委員となっていた。

注目されるのはここでも書画のことで、鞆彦は本書状のほかに、良寛の掛幅を托したようだ。粗末な表装のものがご覧いただければ幸甚という。前提として二人の間に良寛についてのやりとりがあり、今の状況に何か相応しいような内容のものを進呈しているのだろうか。

林響も良寛の掛幅を持っていた。内弟子となった秋野不矩が、大網の画房で掛軸を掛け替えたり、書を学ぶように教えられていたことなどを述懐しており、良寛への心酔が伝えられている。

石井林響の書簡 相原寛太郎宛(新井旅館蔵)

1 明治四十一年四月十四日付

拝啓

天候さだまらず鬱

陶敷候折柄、御在京

の閣下には如何御消

光遊ばされつゝ有之候や

御出立後既に一周日

御入京の報を外にして

は、いまだ委敷御消

息に接せず、ものた

らぬ心ちいたし申候、

御療養の御目的は如

何遊ばされ候にや、それ

とも何かと御多忙に涉

らせられ、いまた御診断

を受けたまはず候にか、

或は面白き事に忙

殺さるしてふおそろしき

事などもあらんかと

しきりにあてなき

想像にふけり居候、

爾来小生も至て健

全彩管に親しむと申し

度きなれども実は

風邪の為の少しく

頭痛になやまされ

氷囊にてひやし候

始末とて御令室様はじめ

皆々様の御厄介を煩

し漸く一昨日起床

いたし、昨今は兎に

角執筆罷在候様

相成候間、御過慮

には及ばず候へ共、

不取敢右様の場合

なりし事御通報

まで申上候

此間は都は大雪

にて大さわざなりしよし
に候へ共、当地は何
等の損害もなかりし
ものゝ如く、むしろ
雪中の桜華に古
来稀なる不思議の
光景を樂しみ
申候、閣下亦或は奇
抜なる雪見の宴など
はり候へしならんか
□□子勝仙兄と語
られ候や、酒中の仙
客雅風氏と相見られ
候や、其他紳士高
士と面白き御談笑
など候はば、時に御
もらし賜はり度
千万希望する処
に御座候、それから
上野の美術村も花
ざかりと察し申候
処、此中旬はまた
咲きかはりのものも多か
らんと存じ候が、御
枉駕などなされ候
や、遠く唐宋元
あたりを思はれ候
閣下の御高眼には
如何御覧じ
られ候や、過日前

橋なる観山宗の
吾一宮崎先生よ
り書信あり、修善
寺趣味の大影響
同氏蔵幅に及ぼし
手が出せぬと申来
り候、いよ／＼神經を
なやまされつゝある
ものと存じ候、
橋本末亡人様には
不良の天候をなげ
く外何もかも御氣
に召し、六暗と嬉
しがり居候、霞
花池はそろ／＼とかた
づくべく見事な
る老松数かぶ植付
けられ嬉しく存候、
毎夜十二時頃までも
長談論にふけり
候習慣により病
後の淋しさ一方な
らず候まゝ閣下
の御帰館の一日も早か
らんを欲すれども
御不快の為め御上京
の事なれば、一日も多
く充分御撰養
專一に御座候 まだ／＼
記し度き心ち候へ共

わかれ
ていふこと
は、いふまでもなく
大いなる悲しみ
を伴ふものである
が、その悲しみの
裏に、いかに
静かなる心で
受け止めてゐる
かが、よく
うかがふことが
出来る。これは
、いふまでもなく
、いかに
静かなる心で
受け止めてゐる
かが、よく
うかがふことが
出来る。

わかれ
ていふこと
は、いふまでもなく
大いなる悲しみ
を伴ふものである
が、その悲しみの
裏に、いかに
静かなる心で
受け止めてゐる
かが、よく
うかがふことが
出来る。これは
、いふまでもなく
、いかに
静かなる心で
受け止めてゐる
かが、よく
うかがふことが
出来る。

わかれ
ていふこと
は、いふまでもなく
大いなる悲しみ
を伴ふものである
が、その悲しみの
裏に、いかに
静かなる心で
受け止めてゐる
かが、よく
うかがふことが
出来る。

わかれ
ていふこと
は、いふまでもなく
大いなる悲しみ
を伴ふものである
が、その悲しみの
裏に、いかに
静かなる心で
受け止めてゐる
かが、よく
うかがふことが
出来る。

わかれ
ていふこと
は、いふまでもなく
大いなる悲しみ
を伴ふものである
が、その悲しみの
裏に、いかに
静かなる心で
受け止めてゐる
かが、よく
うかがふことが
出来る。

図 1

あまり永たらしく候

まゝ先は欄筆

頓首

四月十四日

弟天風 再拝

相原天城様

侍史

(封筒表)

東京日本橋区

通壺丁め 旅館松葉や

相原寛太郎様

(封筒裏)

伊豆修善寺

四月十四日

石井天風

* * *

新井旅館に残る石井林響からの書簡の中で、最も早い日付のもの。林響は二十三歳。前年末から修善寺に逗留していた林響がこの四月にもまだ同地に居ることがわかる。東京の旅館松葉屋にて静養中の相原寛太郎宛に、長引く療養について心配し、早い帰館を願っている。大雪が降り、桜に雪という不思議の光景を楽しんだことなど、近況を報告している。なお、この年の一月、橋本雅邦が没し、三月、林響は存続となった二葉会の幹事となっているが、未亡人も滞在していることがわかる。

2 明治四十一年四月二十日付

お手紙拝見仕候

随分何やかやと御

多忙とみえ候、御

治療はしっかりと

遊ばされ度候、何

より御好物の芝居

大家の蔵幅 時折

はトッチリシャンで なかく

に御慰安も多かるべ

くと存候、異画会

は大奮発と聞及び

しに矢張り駄物

が多きものとか、さてもく

今日安田兄より奈

良の春事こまかに

報じ来り、浦山敷

てたまらず候 近

頃居は春日野町一、

澤山氏方となん

雅風氏の名作賞

も受けられ 売約

ともなわれ まづ一寸

御愛度き方と存候

氏も亦やゝ消沈の

体とか 迎も画家

なんて奴は世間並の

楽感は一六ヶ敷もの

と存候 何の事は

ない丸で春の蝶だ

僅かの露で活きる

そして華より花

を、露命をつな

ぐといふは是が画家

の多くと存候

小弟事病氣お蔭

を以て平癒 爾来

勇猛精進寢食

を忘れて彩管に親

しみ今や其三昧

にありと申したいが

其れはうそにて

雨天中は気がふさ

ぎ晴るれば引き出

され(これは一二度)夕

方なぞの淋しき

夜は食ふとすぐ褥

にもぐりこむ、あた

ら春の日をかくの如

くに消光罷在候

でも此間御承知

の吹笛美人、蓮池

美姫を初じめ大

原の小物(上)、紅葉

(下)牡丹、立野老人への

漁村の月、椎野氏への

山岳、其他三ノ小

物も作り申候、目下

斎藤氏への大作二
点製作中に御坐候、

権藤將軍よりも

依頼を受け申候、

將軍は先日宇都

宮に帰られ申候、か

くの如くにてとんと

はか行かず候が

よく健康旧に□

し候まゝ大に揮

ふつもりに御坐候、御

約束の屏風は是

非とも相談等致

したきものなるが

如何に候や、粹

やら絹やらの都合

もあればいまだ

着手せず候へし、

就ては御帰館

までは

襖やら尺八絹本や

らもあれば是に染

めちらそうと存候、

兎に角 大公の留守

と○○の○○には

さすがにばんやり

致し居候 この

身心ともにゆるむ

長閑な春の日とて

随分御由断なく

御撰養專一に
御坐候

早々

四月廿日

天風

再拝

今日は当地のおまつり

相原様 侍史

(封筒裏)

東京日本橋区通二丁目

松葉や様内

相原寛太郎様 親展

(封筒裏)

御帰館は何日頃にや

四月廿日 石井天風

* * *

前便の返事からまたすぐ差し出された書簡。異画
会や、安田靫彦、橋本雅邦門下の日本画家・吉原雅
風(一八八二―一九二九)らの動向を気にかけてつ、
彩管に親しみ、あるいはまた気が塞いで寂しがる
といった日々を綴っている。吹笛美人ほか、制作した
画についての報告もある。立野、椎野、斎藤、権藤
の各氏という依頼者の名前も出ている。「権藤將軍」
は、「天風会」の賛助員や「天風後素会」趣意書に
も名を連ねる、陸軍中将の権藤傳次(一八六七―一
九四六)と思われる。「椎野氏」は横浜の洋装絹織物

の製造販売を行っていた椎野正兵衛商店の二代椎野
正兵衛か。文面から絵の依頼者等について共通の理
解がみられ、相原が随分と世話をしている背景が察
せられる。屏風制作も約束しており、帰館されたら
相談したいとしているなど、絵の内容についても話
し合う間柄であつたようだ。相原の留守と何(○○
の○○)に、ばんやりしてしまつていたのだろうか。

3 明治四十一年四月二十六日付

相原先生

虎皮下

いよく大手術いたされ
候よし、さぞおいたかつた

事と存じ候、これも片

方丈けと聞き及び候

にや 齒の方は一切相

済み候へしか、過日

は勝仙、青邨の両兄

相見え候よし、嘸かし

面白き事も有しな

らんと奉察候、でも

両兄の事なれば至

而おとなしく画論な

どあたりをおどかす

おそれもなかりし事

と存じ候、もし是が

雅風兄とか更に小弟とか

にてあらんには、諸人の
難渋思遣られ候、

こなたにては毎日故師の

未亡人初め皆健在に

御座候へは御安神願上候、

同人等は月末帰京の□

に御座候、小生も亦御伴い

たし度候が既に力無

之候、斎藤氏の大福

二点、今日豊国銀行

に宛て、発送仕候、実

は御校閲の上にてと思

ひしが一刻も早きがよ

からんと存じ、直接に

差向け申候、小弟近頃

入念のものにて候へし

但し可否は別に御座候、

其他こゝまでおしつけられ

た二三の寄附畫も皆夫

れく染筆仕候、明日

より権藤將軍へのもの

作らんと存じ候

……まだく

随分御自重遊ばさ

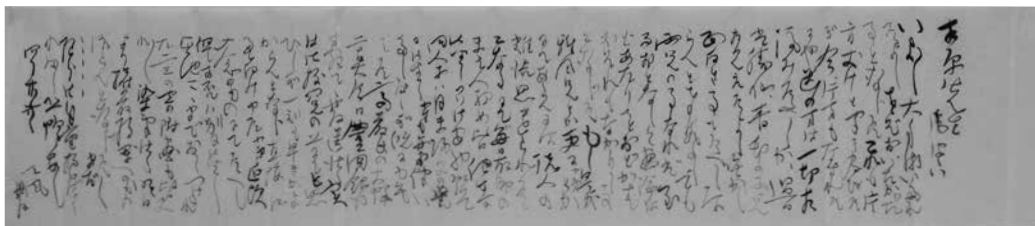
れ度候 恐惶頓首

四月廿六日

天風 再拝

(封筒表)

東京日本橋区



通壺丁め 松葉や
相原寛太郎殿

御直披

(封筒裏)

伊豆修善寺

石井天風

四月廿六日

* * *

療養中で手術を終えたという相原寛太郎へ宛て
た、さらなる続報である。勝仙(広瀬長江・一八八
四〜一九一七)、前田青邨が来られたとの由、吉原
雅風や自分もいたらおとなしくしていなかっただろ
うと面白く記す。橋本雅邦未亡人らは月末に帰京と
のこと。斎藤氏への大幅二点を豊国銀行に宛て発送
したことも報告。その絵は一刻も早い方がよいと思
い事前に見せられなかったが、「近頃入念のもの」
と自信をのぞかせている。

4 明治四十三年四月二十五日消印

(絵葉書 表面)

伊豆國修善寺温泉

新井天城様

いよいよ久々にて明日は故郷

に帰るのを楽しみして
先何よりの語り舛に

各展覽会(東京府)

研精(南宗)、大東等)

を今早朝より

參觀夜に入りて帰

宅すれば思止まら

ねばならぬ事あり

其意を得ず、又

他日を期する事

不得止ものに御座候

残念此事に御座候

つまらぬものも出来

候まゝ御笑艸に差

上仕度候 其内に

天風 再拝

(絵葉書 絵のある面)

此写真では

際立つた長

所と短所とが

判らぬ背

影が極めて

ツマラヌ 否イ

やなものな

れど人物

の態度と色

と泉とがい

つもならず

嬉しく見申候

此繪の右は
之までに御
座候 切りし
にあらず

* * *

高橋廣湖筆「みやびを」の絵葉書(東京美術及美術工芸展覧会発行、画報社製)に書かれたもの。高橋廣湖(二八七五〜一九二二)は、安雅堂画塾で今村紫紅と同期で、異画会でも紫紅とともに評議員となっていた日本画家。明治四〇年、林響も創立に参加した国画玉成会の発起人の一人であつたが急逝する。二葉会や紅児会など共通の場で活躍していた先輩の絵に注目し、対する林響のコメントが、相原に

宛てて率直に綴られ面白い。久々に「故郷に帰るのを楽しみ」にしていたという故郷思いの念も記されている。

5 明治四十四年三月二十七日付

いよ／＼温かに相成候所
御あたり如何に候や
過日御滞京中は

例の閑話の機もなく
何となし物足らぬ
事に候へし、さて

只今は御名座
の椎たけ沢山御

惠贈に相成られ
一方ならず嬉しく

拝受いたし申候

今月中に老母も

帰宅可仕候間、何よ

りの馳走に楽しみ
申候

此程紅児会中

安田兄に毎日面語

ことの外健康のよう

に見受けられ慶賀

此事に存候、前田

兄は画会の成功にて

大元氣、廣

瀬兄は不相変お

となしく、小林兄は

時々沈黙を破りて

あたりをおどろかす、

其他の面々皆く

安泰斯界の為の

大慶至極に存候、

却説御令息君

此頃の氣候にては

弥か上にも御元氣

なるべく其の御小照

拝受いたし度き

ものに御座候、此儀

特に御令室まで懇

願いたし申候

先は御礼旁々

右まで 恐々頓首

石井毅

三月廿七日

天城学兄

侍史

(封筒裏)

伊豆国修善寺温泉

新井天城様

(封筒裏)

三月廿七日

東京南品川五五七

石井毅

石井毅

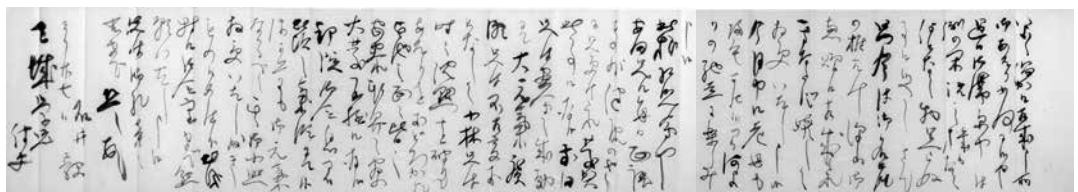


図4

裏



表

* * *



南品川の林響からの手紙。三月の紅児会の最中であり、安田鞆彦に毎日のように会い、健康そうであること、前田青邨は画会の成功で「大元氣」、広瀬長江は相変わらずおとなしく、小林古径は「時々沈黙を破りてあたりをおどろかす」と、紅児会の面々の近況も活写している。林響は二点出品していた。

6 明治四十四年八月一日付

肅啓

此度は永逗留致し
甚だ御厄介相か
け申し候、出立之際
はまた御土産沢
山拝領いたし
且つ過分之補助
料まで添えられ候
事、深く御礼申上候、
実は千歳様分
丈はかねての

お言葉により甘

え可申考に候へし

処、開封すれば之

には過ぎたる御

心つけと知り、却

りて恐縮に存候、

昨夜九時といふに

無事帰宅致候

間御安心下され度、

老母と荆妻とより

よろしく申出で候、

先は取急ぎ御

礼之意まで申述

度余は後便を期

し申候

八月一日

天城学兄

御令室様

恐々頓首

毅三郎 拝

尚々 長江兄へよろしく

願上候

(別紙)

汽車中絶えず

樹木のたをれしと

橋の流失せしと

崖のくづれしなど

風害水難の跡

に心寒く帰宅致

候処、幸小宅には

異状無之候、御安

心下され度候、然かも

海岸はことの外は

げしかりしよし

気の毒に存候

(封筒表)

伊豆国田方郡修善寺

相原天城様 侍史

(封筒裏)

南品川五五七 石井天風

八月一日

* * *

この年もまた修善寺に長逗留をしたことがわかる礼状。この前に、七月二日付葉書にて、雨天などで延引していたがいよいよ晴天を待ちこの葉書と同日に参館」と知らせているので、七月ひと月に亘る逗留だったとわかる。さらに出立の際にはたぐさんの土産に「補助料」まで頂いたようだ。その礼状。帰りの汽車中から災害の痕が見られ海岸の激しい被害に心を痛めたこと、品川宅の無事を別紙で伝えている。この年、七月二十六日にあったらしい豪雨のことか。

八月廿日

天風生

7 (年代不明、明治四十四年か)八月三十日付

拝復

此程横山先生重ねての御出馬

可□之由お楽しみの方に御座候

就ては□銀氏の出張を急

がる儀、御尤も至極に奉存候、

然るに延引いたし候は当方

にても不本意に存候得共

僅か一兩日にして完成すべき

程の仕事をもた重ねて出張

は逆も駄目ならんとも懸念し

且ッ本人も是非仕上るとて

急ぎ居候間相済まぬとは

知りながら遂々如此延引

相成候儀、単に御海容

願入候

拙作六曲屏風につき横山先

生には嘸御苦笑の事と

存候へども、来月開会の展

覧会に間に合ふ製作は

逆も六かしく候間、絵画としては

ナト妙変なれども出品して

川崎氏への義務丈けを

はたし度存候、宛所は上野

公園二号館内絵画彫刻

展覧会(日本美術社)に御

座候

先ずは不取敢右まで

早々

天城学兄

侍史

(封簡表)

養氣館

相原天城様 侍史

(封簡裏)

南品川五五七

石井天風

廿日

* * *

事情が掴みづらいが、九月開会の展覧会への六曲屏風出品について記している。郵便ではなく年代不明だが、天風名で差し出されていること、続報と思われる葉書があることから、明治四十四年のことか。

8 明治四十四年九月九日消印

(官製はがき表)

伊豆国修善寺温泉

新井天城様 侍史

(裏)

日本美術社よりしきりと出

品を急がれ候へども荷造不便なれば見合せ可申か

横山先生は御出張相成られ

候や、銀氏は如何にせしや、間に合はさりしか、不日拝眉を

可致候 早々

石井天風

△小川氏より依頼ありしも俗用多忙の処進行

よろしく

* * *

内容より年代不明八月三十日付の書簡の続報と思われる。日本美術社へは出品を見合わせたか。

9 明治四十四年九月十三日消印

(官製はがき表)

伊豆国田万郡 修善寺温泉

新井天城様

南品川五五七

九月十三日 石井天風

(裏)

御腫物に御難儀遊はされ候や

御経過如何に候や、御都合にて

五浦へ出張いたし度、当方は何

日でもよろしく御座候、さて御

地霊湯は脚気患者には

如何に御座候や、実は愚妻

該病と今日診断あり候、然るに

此乳を飲まず時は幼児は尤も

危険との事につき人の子の

父として心痛せざるを得ず

候間もしあやめの湯に其効

ありとならば御厄介御願

申度御伺申上候、尚一方

居に職人絶えず画会の運

動せねばならず、ツク／＼閉口に

御座候、画会々場は上野常

盤華壇十一月三日と決定

致し度存候間、然様御了承

願上候 取急ぎ右まで 早々

* * *

五浦に出張の旨を伝えるとともに、修善寺の霊湯

は効能があるかをたずね、乳飲み子を抱えた脚氣の

妻を氣遣いご厄介になりたいと願ひ出ている。画会

のために動かねばならないことをばやきつつ、画会

「天風会」のことがこの年十一月三日、上野常盤

華壇に決まったことを伝えている。

10 明治四十四年十月一日付

(官製はがき表)

伊豆国 修善寺温泉

新井天城様

(裏)

其後は如何に御座候や、いよく

画会も近き候まゝ五浦へ急ぎ候

御都合よろしくば御東上待

上げ申候、先は取急ぎ要用まで

委細は拝眉にゆつり可申候

十月一日 南品川五五七 石井天風

* * *

画会(天風会)も近づくなか、五浦へ急ぎ向かうこ

と、ご東上を待つと願ひであるがき。多くの画家た

ちが席上揮毫など協力の運びとなったもので様々な

相談があつたと思われる。

11 明治四十四年十月五日付

(官製はがき表)

伊豆国修善寺温泉

新井天城様

「東京府下／南品川宿／五五七番／石井毅」(方印)

(裏)

爾来一向に御消息を拝し不申候

が御左右如何に御座候や、小生五浦行き

を急ぎ居候、画会の印刷ヤット

只今出来、取急ぎ発送仕候間可

然御高配願上候、却説紅児会

一同決死励精いたし居候、今日竹坡

兄のを見申候、努力可驚木戸御免

の六曲屏風三双!!!

十月五日夜

石井天風

* * *

画会(天風会)の案内状の印刷ができたこと、紅児
会の一同や、尾竹竹坡(二八七八〜一九三六)らの精
励を伝えている。

【天風会の発会】

天風會々規

發会 十一月三日

會場 上野公園 常盤華壇

天風會趣旨

天風石井氏は現代画壇に囑望重きの人なり、其作品は実

に師が玄妙なる感情の表現にして先師橋本雅邦翁深く其

才を愛し推挽尤も努む、翁の逝くや切に感ずるところあり

中央芸苑の名声と絶ちて遠く閑地に修養すること数年

其造詣浅からずして已に清新なる一家の風格を成す、今

や帰り来りて城南に卜居し畫房亦新に成るあり、並に予

等同人是を機とし本会を起して以て絹素の上に氏が深遠

なる蘊蓄を吐かしめんとす、同好の緒彦希くは此意を賛

し別記規約によりて振って入会あらんことを。

明治四十四年十月

主唱者

東京	石川正五郎	東京	原 安民	東京	小野鉦五郎
東京	岡田甲子之助	静岡	渡邊健次	東京	加藤観澄
東京	川村七造	東京	亀井唯二郎	横浜	谷口喜作
東京	田中義一	東京	高橋兼之助	東京	梅室純三
千葉	久貝賢治	東京	国藤廉太	東京	藤根常吉
大阪	古川専之助	東京	船橋理三郎	東京	藤田義郎
東京	小峯奥義	東京	江藤厚作	静岡	新井寛太郎
千葉	佐藤三郎	東京	茂野梅吉	東京	茂野吉之助
横浜	平沼亮三	東京	瀬沼定治郎	東京	鈴木梨坪

(いろは順)

清規

一、本会は石井天風筆新作絵画を会員に頒つを以て目的と致し候

一、発会は来る十一月三日(天長節)晴雨不拘上野公園常盤華壇に於て午前十時より開催可仕候

一、作品及び会費は左の三種とす、

甲種絹本(巾一尺三寸	丈四尺)	双幅	金拾七円
乙種同上(巾一尺八寸	丈四尺五寸)	一幅	金拾五円
丙種同上(巾一尺五寸	丈四尺二寸)	一幅	金拾参円

一、会費は発会当日何種に不限一口につき金参円を払込み残額は作品引き換もしくは翌十二月以後毎月一円宛分納の事但し分納は市内に限り便宜上毎月中旬本会より特に集金人を差出し可申候

○会員二百名を超過する場合には作品自然順延可致につき分納払込みは隔月と変更すること可有之候、

一、画題は会員の望みに応ずべしと雖も複雑なる研究を要するものは協議の上是を定め可申候

一、作品配布順序は発会当日会場に於て抽籤を以て定むる事(但し欠席者は幹事代籤)

一、発会記念として別記諸画伯の寄贈にかゝる絵画を全会員に抽籤にて頒呈可仕候(但し欠席者は幹事代籤) 尚

当日諸画伯廿余名席上揮毫の清興を添ふ、

一、当日昼餐として聊粗酒飯を呈し可申候、

一、入会御望みの方は別記申込書用紙(其要点を記入し発会当日までに御申込み下され度候、

.....

申込入住所氏名	申込書	
	口	画題
甲種	口	画題
乙種	口	画題
丙種	口	画題
紹介者	印	

(裏)

東京府下南品川五百五十七番地 石井方

天 風 會 中

賛 助 員

(いろは順)

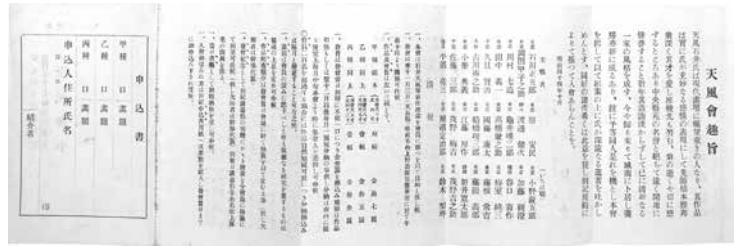
東京	伊藤太平殿	東京	伊藤福雄殿	栃木	伊藤次郎殿
千葉	市川惇治殿	山形	伊藤悦太郎殿	東京	井上鑑三郎殿
千葉	石井貫一殿	静岡	原忠三郎殿	静岡	原田新一殿
千葉	服部半蔵殿	東京	馬場郁太郎殿	千葉	西尾発造殿
千葉	仁茂田兵四郎殿	東京	二階堂保則殿	愛知	本間逕次郎殿
静岡	伴野賢造殿	静岡	時田弘太郎殿	岐阜	千葉泰一郎殿
静岡	丘 宗潭殿	愛知	丘 球学殿	静岡	小澤清作殿
三重	大川親直殿	大阪	岡田幡陽殿	東京	加賀豊三郎殿
東京	川上五郎殿	千葉	田丸 節殿	横浜	田中 茂殿
東京	田中増蔵殿	横浜	田島啓次郎殿	愛知	都築三衛殿

福岡	中山森彦殿	静岡	中田驥郎殿	東京	中村致道殿
栃木	上竹善三殿	東京	呉 秀三殿	東京	山口 鍛殿
静岡	山本晴太郎殿	千葉	矢部 哲殿	長野	町田清治殿
東京	松村清吾殿	東京	眞山頼六殿	東京	藤井美豊殿
栃木	権藤傳次殿	静岡	小杉 潔殿	長野	小島福太郎殿
静岡	安達兼太郎殿	東京	尼子四郎殿	静岡	斎藤文吉殿
静岡	岸澤惟安殿	群馬	宮崎吾一殿	横浜	椎野正兵衛殿
静岡	柴 毅殿	東京	諸井恒平殿	静岡	須田茂馬殿
静岡	杉本 柳殿	横浜	鈴木傳次郎	千葉	鈴木卓爾殿
東京	鈴木 弘殿				

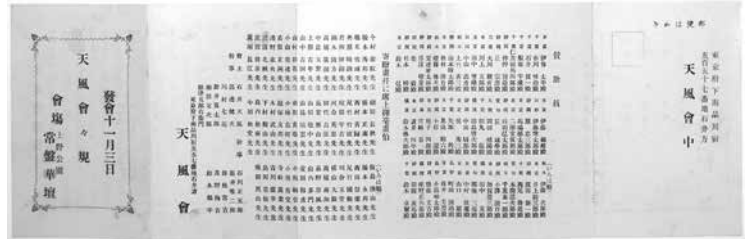
寄贈画並に席上揮毫画伯

(いろは順)

今村紫紅先生	磯田長秋先生	飯島撫山先生
橋本秀邦先生	橋本正素先生	橋本永邦先生
橋爪雪城先生	西田青婦先生	西田信僊先生
奥原晴湖先生	尾竹竹坡先生	尾竹国観先生
若柳柳湖先生	梶田半古先生	川合玉堂先生
鍋木清方先生	河合英忠先生	横山大観先生
高橋廣湖先生	田代古崖先生	高橋南湘先生
中倉玉翠先生	長安雅山先生	長野草風先生
上原古年先生	山田敬中先生	山内多門先生
山中古洞先生	山脇崎雲先生	安田毅彦先生
山村耕花先生	前田青郎先生	小堀納音先生
小山栄達先生	小林古径先生	小泉青堂先生
古賀玄洲先生	越塚友邦先生	寺崎廣業先生
浅野未央先生	木村武山先生	吉川靈華先生
三浦北峽先生	下村観山先生	島田墨仙先生
庄田耕峯先生	島内松南先生	飛田周山先生
廣瀬長江先生	平田松堂先生	



表



裏

會主 石井天風 幹事 石川正五郎
 幹事 渡邊健次 龜井唯二郎
 川村七造 藤根常吉
 新井寛太郎 茂野梅吉
 瀬沼定次郎 鈴木梨平
 根津五郎 右衛門
 東京府下南品川宿五五七番地石井方 天風會

12 明治四十四年十一月三日付
 拝啓
 小画会もお蔭を以て予想以上の成效を得たるを奉謝候、殊に御電報にて御祝下され且ツ十口も御申込み下され候は却りて恐縮いたし候、然し御芳志により謹て拝受いたし候、いづれ明瞭に御報告可仕候得共、先四百之会員を得たるが如くに御座候、幸か不幸か今後の疑問に御座候先は取急ぎ右まで

早々
 十一月三日夜 石井天風
 新井天城様
 尚々御令室へ
 よろしく願上候

(封筒表)
 伊豆国修善寺
 新井天城様 侍史

(封筒裏)
 十一月三日 石井天風
 「東京府下／南品川宿／五五七番／石井毅」(方印)

十一月三日の画会(天風会)の当日、終了したその夜に認められた礼状。幹事として尽力した相原は自らも十口も申し込んだらしい。会員(申込者)が四百名に達したようだと一報している。追って送られた礼状(印刷物)でも、予定以上の盛会であったことなどが述べられている。

【天風会礼状】
 拝啓
 秋分の候益々御多祥の段奉大賀候陳者此度開催の本会が過分の盛況は偏に大方諸彦の御同情に因るものと難有御

厚礼申上候從て発会当日は一々御挨拶可申上筈の処予相
外の雑沓に取紛れ引続き残務に追はれ乍思及欠礼且つ萬
事不行届の段千萬申訳け無之候幸に御寛恕賜はり度奉願
上候並に会主は會員諸氏の為め専念彩管を執りて御温情
に可酬を誓ひ併て将来の御庇蔭を仰度不取敢如此に御座
候恐々頓首

明治四十四年十一月

天風會主唱者一同

新井天城 殿

注意

一、本会は予定以上の盛会の為発会記念絵画殆ど二百点
の不足を来し席上揮毫は大小貳百点以上を余し候間重ね
て諸画伯を煩はし不日贈呈可仕候

一、会費払込み残額は作品引換もしくは翌十二月以後毎
月分納の兩種に有之候処事務手落より伺洩れと相成候間
此際至急御決定願度候

但し清規に基き分納も製作番号貳百以上の向に限り隔
月と改め候

一、本会作品配布順序は発会当日御当籤第(特)番なる事
為念由添候

東京府下南品川五五七

天風會幹事



天風会礼状

13 明治四十五年一月二十七日付

(官製はがき表)

伊豆国 修善寺温泉

新井天城様

南品川五五七

廿七日 石井毅

(裏)

厳寒之候愈、御清勝奉大
賀候、御令息之御元氣さこそ
と察し上げ候、絵所預長江殿には

湯と日向其間興にまかせては筆
も執らるゝ事と浦山敷候、こなた
は騒がしくババツク一向に感興の
人となれずあきれ居候、老母鎌
倉に遊び候為め外出なりがたく候

○ことの外苦しく候 御察し下され度候

14 明治四十五年二月二十八日付

天城相原学兄 侍史

拝啓

昨日は廣瀬君御
使者とありて見事
なる雛一對御祝

ひ下され、長女の光榮

と小家一同感謝に不
堪候、御見立ての任にあ
づかられ候廣瀬君の

御心労また奉鳴謝候、
実は何方よりも呉れ

そうな処へは妙な

断りを申置候間

新らしき雛一つもなき

おりから、御許より賜は

りしは特の外雅致深

く日頃ほしかりし雛

の一ツとして此上なく恐悦

がり早速に飾り立て

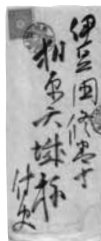
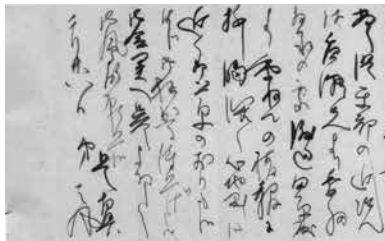


図 14



畫友より寄せられし
色紙の雛と共に少しも

イヤミナキ雛祭り

可仕候、いづれ紅児会

過ぎには拝趨の上

万々御厚礼可申述、

今は不取敢右まで、

尚々倶楽部の近況

は廣瀬兄より委細

拝承の処、渡辺多平殿

より重ねての情報に

接し、胸潤の心地致し候、

近く御上京のおりも候

は、御枉駕^{まが}待上げ申候、

御令園へ呉々よろしく

御鳳声願上候

二月廿八日

弟 天風

(封筒表)

伊豆国修善寺

相原天城様 侍史

(封筒裏)

南品川五五七

石井天風

* * *

廣瀬長江が見立ての任に当たり、林響の長女のため
の雛人形をお祝いに頂いたことへの礼状。画友よ

り寄せられた色紙の雛とともに飾り、よい雛祭りとなつたという。

15 明治四十五年四月十一日付

(官製はがき表)

伊豆国修善寺温泉

新井天城様

(裏)

拝啓 ようく外出の用意

成りて十五日頃罷立^まで度候 長江兄へ

よろしく 御用など候はゞ

仰せ越され度候

十一日 石井天風

* * *

この年、四月十五日頃から、二十二日まで修善寺に逗留^と留^りのことがわかる。出立の時を知らせるもの。
廣瀬長江も滞在していたらしい。

16 明治四十五年四月二十三日付

拝啓

昨日はあまりに勝手なるふるまい吾ながらあきれ申候、幸に

御寛恕願上候、
貴館滞在中は
厚き御もてなし

いつもながら感銘

此事に御座候、

殊に駿河湾の船

遊び臨川の宴等

尤も興深く忘れが

たく彷彿致し居候、

それにつけても廣瀬

君には御氣の毒千

萬に奉存候、

昨夜はチヨード十二時

に相成申候、子供は

オイデくとシャンく

ニギくの三つ丈け進み

居候、母は帰り方の

よからぬことしきりに

せめ申候、依て不取敢

起床早々御託まで

如此に御座候、

乍末筆御令聞様

へよろしく御鳳声

願上候

尚々小生の荷物は

御帳場まで委細

御頼み可申上候間

可然願上候

四月廿三日朝

天風

新井天城様

侍史

近日御大切の『カミソリ』

小包にて御送可申上候

(封筒表)

伊豆国修善寺

新井天城様 侍史

(封筒裏)

南品川五五七

石井天風

四十五年四月廿三日

このときまた新井旅館に逗留し、駿河湾での舟遊び
など興深いもてなしを受けるなど世話になったよう
だが、夜、何か勝手な振る舞いをしたようで、翌朝
早々に無礼を詫びた本状をしたためている。荷物も
帳場に送付を頼んだらしい。カミソリを送ると言っ
ている。

図 16

17 明治四十五年四月二十八日付

(絵はがき表)

伊豆国修善寺
新井天城様

御手紙の儀
恐縮千萬に
奉存候
武器も残り
置き候間 目
下休業の体
御発送方 伏
して願上候

廿八日 天風

* * *

追つてすぐ、絵葉書も送っている。「武器」まで
残し置いてしまい、仕事になっていない様子で、発
送を願ひ出ている。



表



裏

図
17

18 (明治四十五年)五月三日付

吾まゝなるふるまい

して御手数相懸

け申候、荷物只今

正に着いたし候

難有御礼申上候、

中に春草畫集

一部見え不申

候へども之は御手

許宛に長江兄

ともに御持

由なれば或はま

ぎれしならんかと

存候、尚々通送

費と口の油代として

金少し長江兄へ

の手紙に同封致し

置候へども同氏

上京の間際と聞

けば御帳場への

手続き相済ま

せ呉れられしや

否や、兎に角御

氣の毒千萬に

奉存候、

小生が預り候まゝ持参

いたし候「カミソリ」は

小さきものゆへ郵便にて紛失せられて

はと氣づかひ居

候処、渡辺君上京

を幸に之にこと

づけ可申候、延引

の儀御ゆるし願上候、

不日紫紅兄御出

張之由こんどは落

つき可申候、

小生は先月の代りに

大車輪に相つ

とめ居候(でも)

また〳〵後便可得

御意候 早々

五月三日 弟 天風

天城様

侍史

(封筒裏)

伊豆国修善寺温泉

新井天城様

(封筒裏)

南品川五五七

石井天風

五月三日

* * *

送ってもらった荷物が届いたことの礼状。件の
「カミソリ」は、郵便ではなく渡辺君にことづける

ので遅くなってしまうこと、『春草画集』が紛れた
のではないかということ、長江に厄介になっている
ことなど。今村紫紅が出張の由。自分は先月の代わ
りに大車輪で仕事することなど。

19 明治四十五年七月七日付

(官製はがき表)

伊豆国修善寺温泉

相原天城先生

南品川五五七

七月七日 石井天風

(裏)

拝復 益々御多祥奉

賀候、御手数相かけ申候油

畫集とも難有拝受いたし候

然るに廣瀬氏に托し候もの

其ま、封入御返送付相

成恐縮千萬に奉存候

いづれ不日同人一行に加はり拝芝

萬々可申述候 早々

* * *

手数をかけ「油畫集」とともに受け取ったことの
報告。長江に託した「もの」(前便に言う「金」であ
ろう)が受取られなかったことに恐縮している。

20 明治四十五年七月十六日付

拝啓

此度も依例無遠

慮に御厄介に相成

申候、いつもながら

御高配奉謝候、

帰途国府津にて

諸兄に別れ小山氏

と只二人、淋しき

うちにも談笑を

続け九時といふに

無事帰宅致し

先是不取敢御礼

まで如此に御座候、

御一同様へ宜しく

願上候 早々

拝具

七月十六日 石井天風

相原天城様

侍史

特に長江兄へよろしく

尚々月末御上京の節
はキット御立寄待上申候

(封筒裏)

伊豆国修善寺

新井天城様 侍史

(封筒裏)

南品川五五七

七月十六日

石井天風

* * *

紙。
七月、再度逗留し世話になったことへの御礼の手

21 明治四十五年七月二十五日付

そろ／＼御多忙の

御事と奉察候

御上京の節は必

ず御立寄り下され

度候

御照会の春草ハ

(絵)

尺八絹本のつまりしものか丈三尺

全体鼠色の仕上げ御所

蔵の物(鳩)よりは汚れ候も

味ある作と見え申候、帰

朝當時の作に御座候、

(絵)

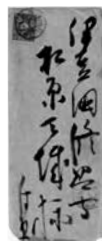


図 21

尺五絹本にして鶏は淡墨の線描あたり温き色、兎に角小生の未見の作風に御座候(春草として)如此物にして右図

は百式拾円、左図

は百五拾に候由

時價なるや否や、

只小生は右図を

好み居候、

先ずは御答まで 早々

御令聞御帰館の

御事と存候よろしく

願上候

七月廿五日

石井天風

相原天城様

侍史

(封筒裏)

伊豆国修善寺

相原天城様 侍史

(封筒裏)

七月廿五日

南品川五五七

石井天風

* * *

菱田春草(一八七四〜一九一〇)の二点の絵について林響に照会したらしくその返答を図示して記した

興味深い手紙。春草の鳩の絵を相原が所蔵していることも承知していることがわかる。時価を尋ねられたのであろうか。(時価は安くとも)帰朝当時の作かを見た「味ある」風景画の方を自分は好むと言っている。

22 大正元年八月二十三日付

(官製はがき表)

伊豆国修善寺温泉

新井天城様

廿三日 石井天風

(裏)

今村君の御作時宗の繪交渉

を試申候処あきれ申候、四五百円

なら望み手もあれど差控居候

など誤托をぬかし候由、勝手

にしがれと申より外無之候、是

が千〇町風に御座候、御諦

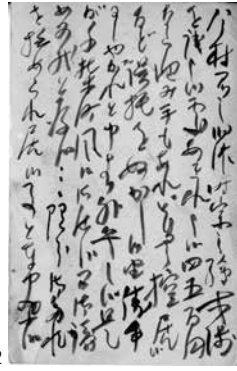
め可然と存候：随分御多忙

を極められ居候事と奉察候

* * *

今村紫紅(一八八〇〜一九一六)の《時宗》の幹旋を林響が引きうけたのだらうか、「四五百円」なら望み手もあろうに「差控居候」といつて話は決裂したようで、勝手にしがれというほかないと、両者

を彷彿として面白い経緯があったようだ。なお、《時宗》（東京国立近代美術館蔵）は、明治四十一年（一九〇八）の作で、その年の第一回国画玉成会（竹之台陳列館）に出品されたものだった。同展に林響は《弘法大師》を出品したが、それは新井旅館に残された。（現伊豆市蔵）



裏

図22

23 大正元年九月二十日付

其後は意外のご無沙汰
いたし申候、昨今全く
秋清の季に入り申候
処皆々様益々御清
安の御事と奉察候、
当方亦幸に無事清
光罷在候間御安意
可被下候、過日来何
かな落つき不申、製
作ために更に進捗不
致候、文展への作品

も漸々にして今日より
取かゝり申候事に候、
既に出来せし方も候
よしなれども大方は
同じく気せはしき
思して執筆中と
聞申候、是も
御大喪故と申も何
とも恐入候、乃木將軍夫妻
の事涙ながらも
吾心身を洗淨せし
事思いたし候、毎朝
將軍の記事を
見るをつとめに致し
居候所、追々記事
の薄れ行くも愁
しく候、
小生が文展への出品の予
定にて取懸り候ものは
流行の金屏風
一双へ丈長き蘆
を描き並べ、左に釣者
二人、右に飛べる白鷺十羽
計りを配し、此間を
風渡りて蘆の裏
羽の白きを見せん
との思考に御座候、
然るところ此蘆の
描法には日夜苦心
するも更に名案

浮ばず、細心にせば
風動かず、草筆に
せば顔料の都合上
キタナラシキ結果を
可見、従て清らかの
意を損じ可申候、
茶白線を用ゆべく
二三の絵具や品切れ
せしめ僅かに十両匁
を存申候次第御
笑察願上候、
曾て及落は念頭
にあらざりしも
今はや、危険の状態に有
之候呵呵
いづれにしても大正改
元第一の文展を可
見、今秋は必ず御
上京の程待上申候、
女しきりに机上を
騒がし一層の乱筆
御判読願上候
九月廿日 天風

天城学兄
侍史

（封筒表）
伊豆国修善寺
相原天城様 侍史

(封筒裏)

南品川 石井天風

九月廿日

* * *

大正改元後初めての文展に出品予定で取りかかっている作品(《白映》のこと)について、構想や苦心の点などを報告して興味深い書簡。特に蘆の描法に苦心しており、画面に風が渡るように、清らかにしたいが、草筆にするか顔料にするかなどとの苦慮を打ち明けている。

24 大正二年三月十一日付

拝啓

此頃品川勢一同

小田原に安田兄

を見舞ひ申候、

一時非常の重患

なりし由なれども

既に安心の程度

にあり候、不遠御

平癒の儀を察

せられ候、ここに前

田兄にも会し申候、

いつもの元氣懸

念する程にもなか

るべきか先以て至

幸に存候、然るに

意外にも大兄の

御怪我といふを

伝聞し驚申候、

昨今如何に候や

御尋ね申上候、近

来大火しきりに候、御

注意奉祈候、沼津

の諸氏には見舞ふの

辞も無之までに同情

に不堪候

三月十一日

天城仁兄

天風

(封筒表)

伊豆国修善寺温泉

相原天城様

(封筒裏)

南品川五五七

石井天風

* * *

「品川勢一同」が小田原に安田鞆彦を見舞いに行つたことを伝えている。一時非常の重患であつたという。ここで前田青邨にも会った。相原が怪我をしたらしい。

25 大正二年四月二十一日付

春和の候、御経過

如何に御座候や、

昨日は青葉の浮

月楼に川上氏得

意の展覧会に

参加いたし其帰

途には是非共御

尋ねいたし度心算

の所、故障ありて

乍残念欠席

いたし候次第に御座候、

此頃の御地は忘れ

がたくなつかしき

記憶を呼び起し居候、

いかにかして罷越し

度切望いたし其機

を待居候得共、

数日前より増築

を初め本月中には

竣成の予定に御座候

間、来月に延び可

申待遠き思致し

小生近來殆ど他出

いたさず珍しく

勉強いたし候、慰み

としては小品の古

画二ツ三ツ手に入れて

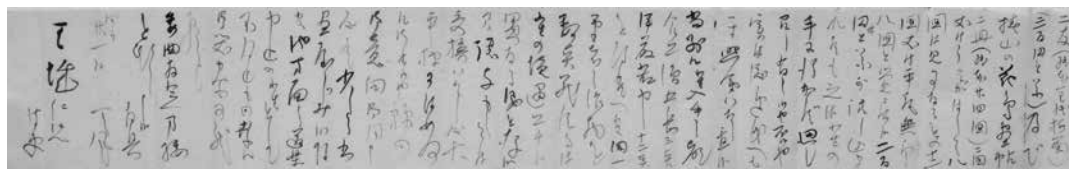
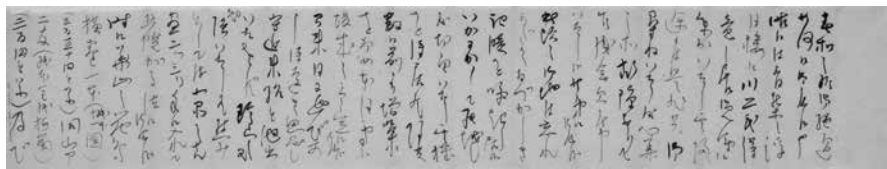
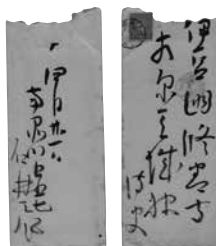


図
25

恐悦がる位に御座候、
ときに華山の花鳥
横巻一本(紙本十一図)
(三百五十円といふ)同山中
二友(紙本全紙梅菊)
(三百円といふ)及び
椿山の花鳥画帖
二冊(紙本廿四図)二図
丈うたがはしく八
図は見事なるもの十二図
丈け平凡無印
八図と覚居候二百
円冊といふが話し込ま
れ候も、之は小生の
手に行かず思し
召し有之候や否や、
実は渡辺氏へも
一寸照會いたし置き候
尚別に小生入手の都
合□□□□三点
伊藤若冲 十二点
を得候へ共同一
筆者の作物を
数点蔵するは
小生の境遇上チト
愚なる儀と存候
間、譲与もしくは
交換いたし度、大
平様には如何
に御座候や、豫の

御意向御伺申
度候、少しく書
画屋じみ候得
共、多方面の道楽
中止の小生として
不得止もの幸に
御笑察可然
願上候、
委曲拝芝万縲
を斯し申候 拝具
四月廿一日 天風
天城仁兄
侍史
(封筒表)
伊豆国修善寺
相原天城様 侍史
(封筒裏)
四月廿一日
南品川五五七 石井天風
* * *

数日前から増築をはじめ、本月中には完成予定のこと。外出せず勉強していること、慰みとして小品の古画を二、三人手していることなどの近況を伝え、椿山の花鳥画帖に関心があるかを尋ねてみる。他に伊藤若冲の十二点を得ていること、しかし、譲与もしくは交換を望んでいること。「書画屋



じみ」ているが、「多方面の道楽中止の小生として」などと記している。この頃の高書画収集の様子がわかる。

26 大正二年五月十五日付

拝復

其後当方どき

くさまぐれに

遂御尋ねも不

仕候処、御令室様

及御子息様の

御容態如何に被

為在候哉午後

馳向上候、次に

不器用なる荆

妻が□申候

海苔少々御口

には叶はぬ事と

知りつつ心計りに

御送り申候を、過

分なる御形容

沢山に賛辞を

寄せられ恐縮

此事に奉存候、

然し案内状も差

出し不申得なし

為の御開封延

引せられ候事、
多少は其味を
損ぜしならんと
妻女口惜しがり
申候、

先日一寸御報申上候、
椿山の画帖は
他に片つき申候
得共小生別に■

■ 隆古

一幅入手いたし候、
尚氣持よき伊
孚九の書小点
も得候、之は如何
あるべきものか、
追々不順の候
に向ひ可申候まま
随分御自愛
專一に奉祈候、
皆々様へよろしく
願上候 早々
五月十五日 天風

天城盟兄

侍史

(封筒表)

伊豆国修善寺

新井天城様 侍史

(封筒裏)

南品川五五七

石井天風 五月十五日

* * *

引き続き、林響の高書画収集のことがわかる手紙。前書簡で話題であった椿椿山の画帖については他に買い手があつたようだ。別に高隆古、伊孚九を入手している。

27 大正四年四月二十日付

拝啓

其後は不一方御無
沙汰に打ち過ぎ何とも
申し訳無之候、陳は先
年の画会も累片
つき申候所、此程また
厚かましき希望を
抱き別記の後援
会を起こして頂き申候
については従来の関
係上御尊名無断
借用致し置き候間大
目に御察しを願上候、
前景気はなか／＼に
よろしくは候得共
時節柄油断なり

かたく存候阿々、

尚々此程高橋光三

色々御高教に預り

難有御礼申上候、老

人はチョイ／＼出馬に有之候、

此度も何かと御助力

下され居候、

兎も角此會さへ

出来れば少しは勝

手な修養も出来

可申心算に御座候、

発會當時御上京

のおついででも有之候はば

是非御奮臨の栄を

得度今より御願申上候

御一同様へよろしく願上候 早々

卯月廿日 風生

天城学兄 侍史

尚々高橋光三帰京

の節 南画三大家集

御持たせ願上度候

敬具

(封筒表)

伊豆国修善寺

相原天城様 侍史

(封筒裏)

卯月廿日

南品川五五七

石井天風

* * *

先年に続きまた別の後援会(天風後素会)を起こしてもらい、名前を借りたことなどを記す。この会さえ出来れば少しは勝手な修養もできるだろうという心づもりと、協力を願う手紙である。

【天風後素会の発会】

大正四年五月二十三日午後一時發會

天 風 後 素 會 (印)

發會々場上野公園

精 養 軒

●天風後素會趣旨

芸術は是れ感情の発露なり、然らば作家の個性は実に之が生命たらずんばあらず。然るに現時の風潮を觀れば、滔々として、或は因襲に囚はれ、或は時流に酔ふて、毫も個性の尊重すべきを思はず、徒らに空虚なる製作を繰返しつつあるものの如し、豈に浩嘆に堪ゆべけんや。而して鑑賞家敢て之を咎めず、作家も亦単に職業として意味なき労作に甘んずるの觀あるは、不徹底の甚しきものと謂はざるべからず。幸に幾多の評論家は漸く覚醒を叫び、賢明なる一部の作家の呼応して起ち、之が新運動を

開始せるものあるは、聊か意を強くするものなくんばあらず。

画伯石井天風君深く茲に見るところあり、心身を芸術の壇上に献じて、大に奮勵せんとするの志あり、乃ち絶対に干渉を避け、飽く迄自由意志を尊重し、充分に個性を発揮せしめ、其製作をして一段の光彩を放たしめんことを希望し、爰に同志相謀りて斯会を企てたる所以なり。是れ決して私情より出でたる姑息の小策にあらず、聯か新運動に向つて意義ある後援を為すに足るの一方法たらんと信するを以てなり。就てはやがて其成績を集めて、之を発表し、世評に問ふことあらんを期す。大方博雅の諸賢希くは微衷を諒とし、奮つて贊助あらんことを、至囑に堪えざるなり。

大正第四乙卯仲春

天風後素會

主唱者

(いろは順)

千葉	五十嵐重郎	下関	磯部勘七	東京	石垣甲子造
東京	石川正五郎	上総	石井貫一	東京	石井權蔵
東京	調所武熊	大阪	脇本米司	伊豆	渡邊健次
東京	亀井唯二郎	東京	上村新五郎	東京	川村七蔵
東京	吉田克巳	東京	伊達源一郎	東京	高橋為三郎
大阪	高橋崑吉	東京	高橋軍平	東京	田中義一
横浜	田中 茂	東京	中南定太郎	東京	村越鶴吉
東京	村松市太郎	東京	潮田竹次郎	東京	国藤廉太
東京	松澤與作	東京	松本不卷	大阪	藤澤友吉
東京	藤根常吉	東京	古川金次郎	東京	福島於菟吉
東京	小峰興義	伊豆	相原寛太郎	東京	榊原定右衛門
東京	齋藤省三	東京	坂井義三郎	東京	三宮徳之助
東京	関 直彦	東京	千田貞治	東京	妹尾勇吉
東京	鈴木栄次郎				

約 束

●目的は石井天風画伯の後援を兼て同氏会心の作を会員諸氏に頒つ事

●発。会。は。来。る。五。月。貳。拾。参。日。〔第四日曜〕午後一時より晴雨に拘らず半日の清遊を期し上野公園精養軒に於て左の通り開催す。

席上小点揮毫〔諸画伯一同〕色紙短冊画帖扇面を程度とす、席上楽焼〔諸画伯一同〕花瓶茶器德利盃洗香合肉池等、新講談〔細川風谷氏〕 狂言〔山本東次郎氏外同社中〕

三曲合奏〔尺八関口月童氏琴宮本美根和氏三弦塚本栄花女史〕

晚餐〔六時頃食堂開始〕 御土産〔天風氏作何か一点づ〕

但し当日御欠席の方に対してはお土産の外発会記念までに席上製作を添へて贈呈す

●会。費。及。払。込。み。方。法。は。左。の。通。り

甲種 金参拾圓
乙種 金貳拾圓

右は発会当日何れも金五圓を申受け翌月より甲種は金壹圓半、乙種は金壹圓宛拾五ヶ月払込甲種残額貳圓五拾銭は作品引替の事、但し市内は毎月集金入を差出し伝票御捺印の上御渡しを願ひ、地方の方は振替又は為替にて専任幹事宛て御送金を乞ふ、尤も此繁雑を避くる為め発会当日一時全納又は当日作品引替の両度に等分して御払込みあるも御随意。

●作品は其趣旨に基き図題手法等筆者に自由を与へられ度従て絹紙大小は予め規定することを得ず、但し幾分でも公平を期し二点或は三点を組合せ一口と成すもあら

ん、甲種は筆者配合の表装其匣附、乙種は飯巻の事。

●製。作。期。間。は。会。員。数。に。応。じ。多。少。の。伸。縮。を。免。れ。ず。と。す。る。も。飯。に。沓。ケ。年。半。を。予。定。す、作。品。全。部。完。成。の。上。一。堂。に。展。列。し。て。会。員。諸。彦。は。元。より。一。般。同。好。者。の。清。鑑。を。仰。ぎ。そ。し。て。後。抽。籤。を。以。て。そ。れ。／＼。会。員。御。一。同。へ。頒。呈。の。事。

●中。途。御。退。会。の。場。合。は。既。納。の。会。費。は。諸。雜。費。に。繰。込。み。時。誼。により。相。当。の。作。品。を。酬。ゆる。こ。と。あ。る。べ。し。

●御。申。込。書。は。別。記。の。用。箋。へ。要。点。御。明。記。の。上。本。会。事。務。所。又。は。各。幹。事。の。手。許。迄。遅。く。も。発。会。前。三。日。ま。で。に。御。送。達。を。乞。ふ、是。は。一。切。の。準。備。上。特。に。希。望。す。る。処。

●御。欠。席。の。場。合。は。予。め。代。人。御。指。定。を。願。ふ。

幹事 調所 武熊
同 日本橋区樽正町十四番地

同 芝区愛宕下町四丁目西一番地
同 吉田 克巳

同 京橋区弓町貳拾貳番地
同 中南 定太郎

同 京橋区宗十郎町拾貳番地
同 古川 金次郎

同 本郷区駒込上富士前町参番地
同 小峯 興義

同 京橋区参十間堀参丁目沓番地
専任幹事 茂野 梅吉
電話新橋貳参九六
振替東京壹八参九六
.....
東京市京橋区三十間堀三丁目一番地

茂野方

天風後素會事務所

(裏)

天風後素會中	右大正四年 月 日 入会申込候也	會費	口数	種別
		月賦 全納 二回		
		紹介者		入会者
		姓名	姓名 住所	

茲に本会を發表するに当り日頃天風画伯が知遇を辱うせる各位の芳名を録して謹で敬意を表す

天風後素会 (いろは順)

石川照勤殿	石川角蔵殿	石原吉太郎殿	石井仁助殿
石井清秀殿	石井 佑殿	石井徳太郎殿	伊藤 栄殿
伊藤太平殿	伊藤悦太郎殿	伊藤福雄殿	伊藤定次郎殿
伊藤彌三郎殿	伊藤柳助殿	今井甚太郎殿	今井興志雄殿
市原 求殿	市川惇治殿	井上公二殿	井上孫太郎殿
池田照誓殿	池田宙堂殿	猪服淇清殿	猪橋幸吉殿
岩井伊三郎殿	飯塚金太郎殿	林吉之助殿	服部政吉殿
服部竹二郎殿	服部半蔵殿	長谷川敬二殿	畠中金次殿
原 安民殿	原田熊治殿	原田新一殿	二階堂保則殿
二宮景輔殿	仁茂田兵四郎殿	原忠三郎殿	原 保太郎殿
細谷丈夫殿	堀清三郎殿	堀内正宏殿	本田元俊殿

富山栄吉殿 富田忠太郎殿 富樫文次殿 豊田鉄太郎殿
友田芳太郎殿 友野欽一殿 伴野賢造殿 鳥居欽八殿
大倉忠吉殿 大川親直殿 大川賢之助殿 大西直三郎殿
大熊周利殿 大野吉五郎殿 太田信義殿 尾間 明殿
丘 宗潭殿 丘 球学殿 小川鐵五郎殿 小澤仙太郎殿
奥平浪太郎殿 小野鉦次郎殿 岡田播陽殿 蔵 真三郎殿
加賀豊三郎殿 加藤龜太郎殿 加藤觀澄殿 川村市左衛門殿
川上五郎殿 兼坂又吉殿 片倉馨亮殿 吉田正藏殿
興田利作殿 玉置文次郎殿 田家九七郎殿 田山宗堯殿
田中錦太郎殿 田中増藏殿 田中弘三殿 田中喜一殿
田中喜三郎殿 田島啓次郎殿 高橋雅之助殿 高橋正雄殿
高橋彦次郎殿 高野斧三郎殿 高橋久太郎殿 高坂徳鳳殿
高澤善作殿 高橋はつ殿 高木末吉殿 谷口喜作殿
龍岡萬敬殿 多田徳助殿 園村道太郎殿 津村重舍殿
津久井省已殿 辻又兵衛殿 土屋治三郎殿 中村源彦殿
中山森彦殿 中村致道殿 中村彌一郎殿 中村 讓殿
中村隆貴殿 中村興一殿 中島 彌殿 中雄重次郎殿
中北庄吉殿 中田騷郎殿 南條哲次郎殿 長原新治郎殿
永田謙一殿 長田貫重殿 永井熊太郎殿 村井五郎殿
村田莊五郎殿 内田好之輔殿 上松 翁殿 梅岡巳之吉殿
梅室純三殿 梅津小次郎殿 上田徳太郎殿 宇田川庄吉殿
野原常二郎殿 野村半次郎殿 栗原白嶺殿 栗原金藏殿
黒住弘毅殿 国枝鎌三殿 久我和三郎殿 久貝賢治殿
呉 秀三殿 家島常七殿 山上信吉殿 山田信介殿
山田莊吉殿 山谷徳次郎殿 山口 鍛殿 安井健次郎殿
山口善兵衛殿 矢部 哲殿 正木音次郎殿 松崎松之助殿
松田直七殿 丸尾 修殿 町田鉄之助殿 町田清治殿
藤根久吉殿 藤井美豊殿 藤田義郎殿 古川専之助殿
古屋幾久男殿 二見鋼太郎殿 船橋理三郎殿 福井忠兵衛殿
深野半藏殿 小池作三殿 小杉 潔殿 小島福太郎殿

小森市松殿 近藤和三郎殿 近藤多喜司殿 近藤加久藏殿
児島喜仲殿 榎藤傳次殿 江原栄次郎殿 江藤厚作殿
寺崎乙次郎殿 赤堀 茂殿 尼子四郎殿 秋田和男殿
新井為三郎殿 荒井龜三郎殿 新井龜水殿 有地健祐殿
有尾さだ殿 浅井辰五郎殿 浅野幸作殿 穴原栄次郎殿
青柳正喜殿 青木米作殿 朝比奈幸太郎殿 安達兼太郎殿
安倍好之助殿 笹岡省三殿 齋藤 壽殿 齋藤周作殿
齋藤玉男殿 佐藤三郎殿 櫻井二郎殿 酒田啓次郎殿
澤村則辰殿 朔 順次殿 坂倉古兵衛殿 坂口格太郎殿
佐藤雄之助殿 清川弘道殿 木村農夫吉殿 木村きく殿
木村儀四郎殿 木原善太郎殿 岸澤惟安殿 三輪善兵衛殿
三宅鑽一殿 三原新太郎殿 三澤竹三郎殿 宮崎吾一殿
宮田篤郎殿 紫 毅殿 柴田忠吉殿 柴田仁兵衛殿
柴丑之助殿 柴垣鼎太郎殿 篠原領葉殿 篠原久五郎殿
篠崎清五郎殿 白名雄次郎殿 島津金七殿 椎野正兵衛殿
平山勝敏殿 平沼亮三殿 平尾鐵也殿 平野絹次郎殿
平井榮太郎殿 平田篤次郎殿 諸井恒平殿 守田寶丹殿
関口茂平殿 瀬沼定次郎殿 鈴木梨坪殿 鈴木延太郎殿
鈴木利三殿 鈴木小十郎殿 鈴木伊之助殿 鈴木銀次殿
鈴木賢吉殿 鈴木卓爾殿 鈴木信一殿 鈴木谿郎殿
鈴木 學殿 杉本九八郎殿 杉本 柳殿 菅禮之助殿
陶山善三郎殿 須田茂馬殿

○画房

東京府下南品川五五七番地

石 井 天 風

○事務所

東京市京橋区三十間堀三丁目一番地

天 風 後 素 會

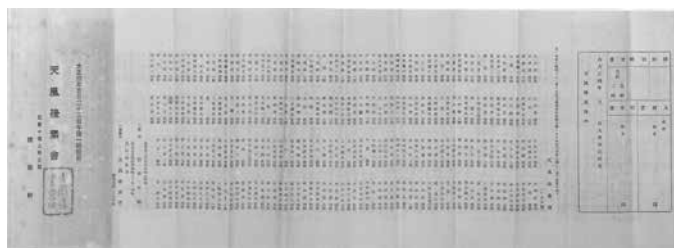
電話新橋二三九六番

【天風後素会 案内状】

拝啓春暖の候益御清福に被為在大慶至極に奉存候陳ば本
会は石井天風君を後援すべき目的を以て来る五月廿三日
午後上野公園精養軒に於て発会可仕当日は別記の通り半
日の清遊を期し申候間御多用中枉げて御来臨の栄を得度
此段御案内申上候 忽々



表



「天風後素會」

裏

大正第四仲春

天風後素會(印)

相原寛太郎 殿

追て御出向之節は此状御示し願度尚来否予め御一報下さらば幸甚

(裏)

余興午後一時より

一、席上小點揮毫

一、席上樂焼

一、新講談

一、狂言

一、三曲合奏

晚餐午後六時より食堂開始

(諸画伯一同)
(諸画伯一同)
(細川風谷氏)
山本東次郎氏
外同社中

尺八 関口月童氏
琴 宮本美根和氏
三絃 塚本栄花女史

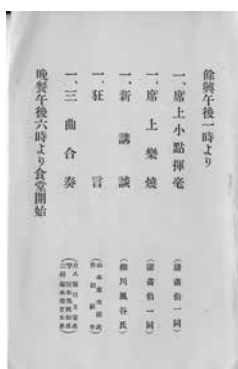
* * *

「天風画会」に続き、大正四年には林響の後援を兼ねて作品の頒布を目的として「天風後素会」が起こされた。趣旨の記された申込書と案内状の次第の通り、五月二十三日に上野公園精養軒において発会式が行われた。作品の制作期間としてはここではおよそ一年半が予定されているが、その後「延引」しながらも全部完成し、約二年半後の大正六年十二月九日、東京美術学校校友会倶楽部において展覧し、会員に頒呈されたことが、同会案内状(茂原市武田

勘七郎家文書より、『千葉県の歴史 資料編 近現代8』に翻刻)によつてわかる。



表



裏

天風後素会案内状

28 大正十二年六月二十二日付

沐芳老兄

其後引き続き御滞在のやうに伝承いたしました。がもう御帰りの事と拝察いたします。さて其おり御話いたしましたました雅邦翁の筆塚もいよく進捗いたしましたして昨日地鎮式を済ませました。其席上、下村川合両先生初め委員まであなたの御寄附下さるやうな事まで申出ました処、是非それは御賛成を

願った方がよいといふ事でしたから茲に改めて私から御願申し上げます。どうぞ至急に御送達下さい。(本郷区神明町四四五 橋本宗次郎宛)

ついで又筆塚、本門寺、橋本家、それ〳〵へ一巻づつ、納める門生連名に要する御芳名を別紙三枚御認め御同封願ます。之は月末限りとしてあります。

六月二十二日

響生

(封筒表)

伊豆国修善寺温泉

相原沐芳様 侍史

(封筒裏)

南品川五五七

石井毅三郎

六月二十二日

* * *

林響の師である橋本雅邦の筆塚を池上本門寺に建立することについて寄附を求める手紙。大正十一年六月二十一日に地鎮式を終えたこと、下村観山や川合玉堂らの委員に相原の名を林響が出したことなどがわかる。筆塚に納める名前執筆も依頼している。

29 大正十二年九月七日消印

(官製はがき表)

伊豆国田方郡修善寺

相原寛太郎様

(裏)

南品川五五七 石井林響

惨また惨、御地如何
御安全を祈りつゝ、
当方一同無事を御
知らせ申し上げます

* * *

関東大震災直後の無事を知らせるも、惨状が伝わるようなはがき。表に赤鉛筆で「9. 17.」と書き込みがある。消印は九月七日だが、郵便到着の日付か。

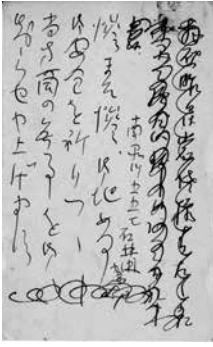
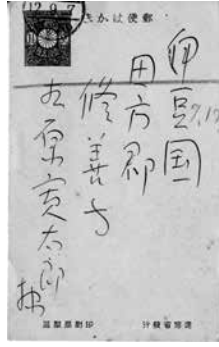


図29

裏



表

30 (大正十二年)九月十九日付

(官製往復はがき「返送用」表)

静岡縣田方郡修善寺

相原寛太郎様

九月十九日

「東京南品川五五七／石井林響」(住所印)

(裏)

つく／＼生存を不安ならしめた程の天然災も御地に及ばざりしは何よりの御幸福です、当方多少の被害はまぬかれませんが一族愛禽ともに無事、当時御安心を得度早々はがき出しましたがおそらくは

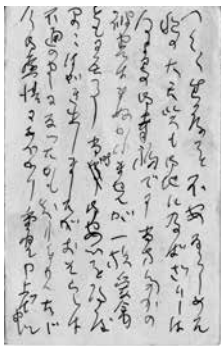
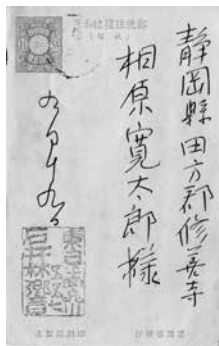


図30

裏



表

不通のまゝになったかも知りません、たゞ今御懇情にあづかり重ねて申し上げます

* * *

震災後、「一族愛禽ともに無事」を知らせるもの。返信用はがきに書かれており、まず相原より往復はがきにて修善寺に被害及ばなかったことの一報がなされたようである。「相原寛太郎行」の宛名は林響の筆跡ではなく、相原はこのようにして各方面へ安否気遣いの連絡をしていたと思われる。

31 (大正十四年)三月十五日付

(官製はがき表)

伊豆国 修善寺温泉

相原沐芳様

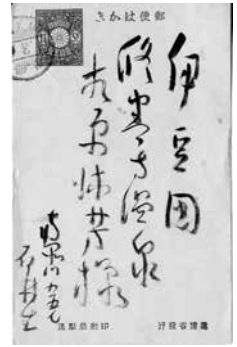
南品川五五七

石井生

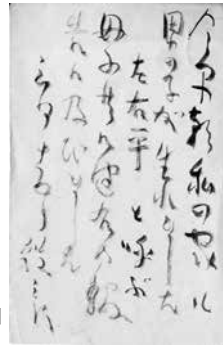
(裏)

今早朝私の家に
男の子が生まれました
左右平 と呼ぶ
母子共に健右御報
告に及びました

三月十五日 毅三郎



表



裏

図 31

32 大正十四年四月十六日付

拝啓

春和の候ますく

御平安大賀此事に
存じあげます、陳ば

此度豚児の為め

過分なる端午の

御祝を寄せられ光栄

此上もなく御芳志

の程小家一同難有

御礼を申し上げます、

爾来母子共至って

健康御安神を願ます、

不取敢右拝受の

御挨拶のみ 早々

四月十六日

沐芳老兄

玉察下

響生

追而此頃稀らしき
石澗和尚之黄山写生
の画冊を手に入れ独り
悦び居ります、新羅山人
の仿古山水冊もあれど遙
かに及ばず、ぜひ御一覽
を願ます

(封筒表)

伊豆国修善寺

相原沐芳様 研北

(封筒裏)

南品川五五七

石井林響 四月十六日

* * *

この年三月、待望の長男が誕生した林響が、端午の祝を受け取った礼状。追って書きに、大名品、石澗《黄山八勝画冊》を手に入れた悦びを記している。この入手も三月のことであった。書風の変化は歴然としており、大正半ば頃から候文でなくなっている。

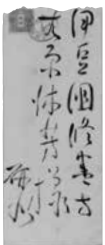
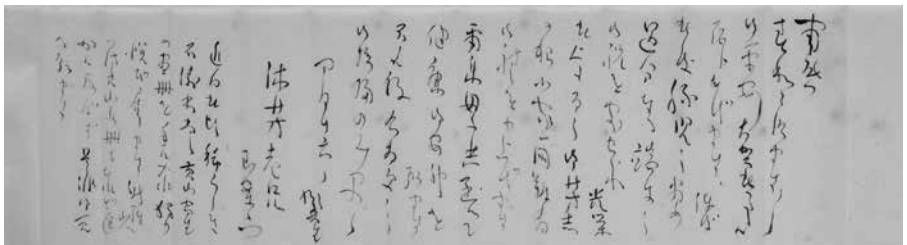


図 32

33 大正十四年五月十一日付

拝啓

先日は豚児の爲め過分の御祝を辱し恐縮此上もありません御芳志に甘え幟と燈台とを買いました他から祝はれしもありません、小居未曾有の武張った節句を見ました、謹々御礼を申し上げます、只今微意までに小包を差上げます中の支那製の青墨はつまらぬものですが紙本には妙かと思はれます、御試み下さい若葉のおあたりを浦やみつゝ 右まで御一同様へよろしく

五月十一日

穀三郎

沐芳道兄

研北

(封筒表)

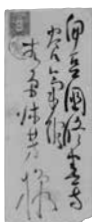
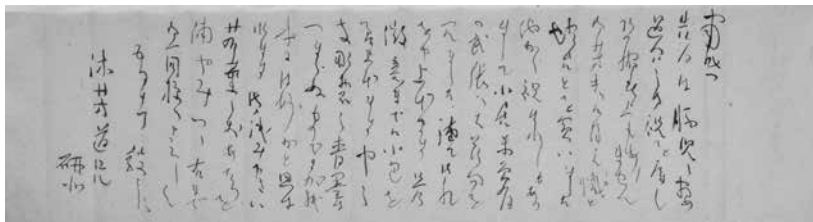


図 33

伊豆国修善寺
養氣館
相原沐芳様

(封筒裏)

東京南品川

石井林響

五月十一日

* * *

長男の端午に寄せられた祝で幟と燈台を買ったという礼状。返礼に中国製の青墨を贈っている。林響は「文墨雑話」を著し、『美術新論』三卷第十号、昭和三年十月、「墨は主に吾々は青墨を愛用するが、それに何の理屈があるのではなく、色々使って見る内に、青墨の持味が紙の上にシツクリする様で、また自分の氣持にシツクリするからである」と述べている。また浦上玉堂や岡田米山人といった林響の敬愛する南画系の作家が青墨を用い、自分も青墨を所蔵している旨を語っている。本状から、既に大正半ば頃にはこの趣味に凝っていたことがわかる。

34 (年不明、大正十五年か) 八月四日付

拝啓

打続く災天に熱

氣弥加はりどう

なる事かとおそれ
をなせし折柄やうく
に雨に恵まれ千草萬木と共に
生氣加はるを覚え
えました

御左右如何あられますか

過般御芳書に預

りながら雑用に紛

れやうやく只今

拝誦せし次第何共

申訳けもありません

御苦悶は例の村民

との御関係にてもあら

しにや御文意に依

て容易ならざるものゝ

ありしやに拝察

それに御健康に

御異状のあられし

は一段と御心痛を

覚えさせられしなるべく

でも今は総てを勝

利の解決とは大慶

至極に存じます

正義と善戦とは

いつもかくあるべきもの

と信じます

くれぐれも御自重を

祈ります

小生は昨春来営み

かけし畫房やうく

に成り野人野に帰れる心地して自悦罷在ります、妻子も暑休の為め当方に團欒するのです、御安心下され度御一同様へもよろしく願上ます御上京のついででもあられましたらこちらへ御狂駕願はしく待上げます

八月四日 響生

沐芳仁兄 研北

(封筒表) 伊豆国修善寺 相原沐芳様 研北

(封筒裏) 「千葉県大網町宮谷郷 白閑亭」(角印) 石井林響

* * *

千葉県大網町宮谷の「白閑亭」からの手紙。新しい画房が完成し、「野人野に帰れる心地して自悦」という心情を伝える。妻子も暑休のため合流の由。これが新井旅館に残された林響の最後の書簡となった。

35 昭和五年二月二十四日付

(官製はがき表)

伊豆修善寺

相原寛太郎様

千葉縣大網町

宮谷 石井きん

(裏)

拝啓 主人儀一昨廿二日

病氣再發致目下

重態ニ有之候間一寸

御通知申上候

二月廿四日

* * *

林響の妻より、林響が倒れ重態であることを知らせるもの。



裏

図 35

訃報

父 林響儀宿病再發二月廿五日午前三時十分死去致候間此段謹告仕候

追而來ル二月廿七日午后二時ヨリ三時迄大網町宮谷本國寺ニ於テ佛式ニ依リ告別式執行可仕候

千葉縣大網町宮谷

昭和五年二月廿五日

男

親戚総代

左右平 石井要吉 茂野梅吉 島田墨仙 安田鞍彦 磯田長秋 伊東深水 佐藤三郎 石井與作 門人一同

友人総代



訃報

【七七日忌挨拶状】

皆々様御変りもなくお過ごしのこと、存じ上げます。

扱 夫石井林響死去の節は、いとも厚き御同情を賜り御鄭重なる御供物を頂戴いたしました事は身に染みて難有御礼申し上げます。

亡夫が昨年三月廿四日突然脳出血症に冒されました節は皆様に一方ならぬ御心配を掛けましたが、幸ひにも漸次快方に赴きまして、十月頃には画筆を執れる程に些しの故障も残さず恢復したので御座りました。然し其後も油断なく養生を続けて居りました処、去る二月廿二日夕刻の事で御座りました。俄かに左手が痺れ、続いて激しい頭痛を訴へました。悲しくも再度の脳出血で御座ります。此時の驚きは申し上げ様も御座りません。直ぐと医師を招き出来る限りの手当を致しましたが、其甲斐もなく竟に廿五日午前三時に歿しました。行年四十八歳で御座りますので、もう些し存へて居て呉れたらばと残念に存じます、御察し下さいませ。

遺骸は自寓の直ぐ傍の、法流山本國寺境内の丘上に埋葬致しました。此の場所からは亡き夫が生前愛好して居りました、宮谷一带の風光を見渡す事が出来ますので、仏も心静かに眠って居て呉れる事と、夢のやうな悲しみの中にもこれ丈は喜んで居ります。

昨年十月に病後初めての画筆を執った時の亡夫の喜びの傍が未だ目先に御座りますのに、本日は、はや七七日忌

の仏事を営む身と成りました。別便で御送り致しました版画は亡夫がその時回春の喜びに浸って写生帖に筆を執った小品で御座います。御目に掛ける程のものでも御座りませんが、満中陰の御印に代え、且は日頃御親しく願って居りました皆様にいつ迄も石井林響を記念して頂き度いと存じまして、失礼ながら御贈り致します。御受納下さいますれば誠に仕合せに存じます。

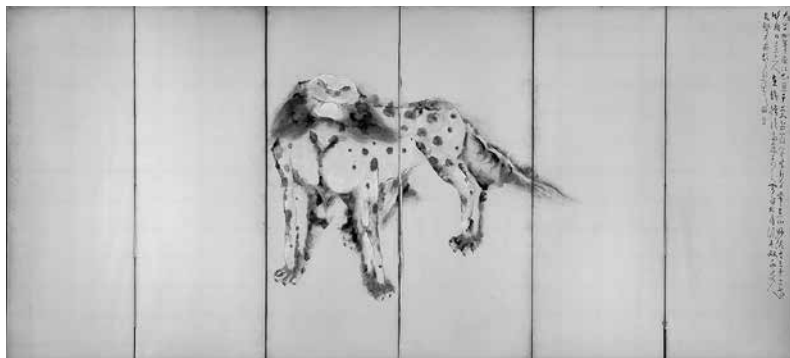
いまだ心も取乱れて居りますので、亡夫生前の御交誼に對し御礼をも申し尽しませず、甚だ勝手に御座りますがこれで失礼させて頂きます。末筆ながらとく／＼宜敷く御願ひ致します。

昭和五年四月十四日

石井きん子

〔付記〕

私信を主とする本資料の掲載につきましては、ご遺族である石井淳様、安田由紀夫様、新井旅館の相原葉子様に格別なるご理解とご了承を賜りましたことを御礼申し上げます。翻刻にあたっては、新井旅館より資料提供を賜り、文書整理番号のある同館保管の読み下し資料を参照させていただきました。安田鞆彦書簡の難読字については池田宏様のご協力を得ました。記して感謝いたします。



【図版解説】石井林響《唐獅子牡丹図屏風》

紙本墨画淡彩六曲一双 各隻縦一六八・〇、横三六九・〇センチ
大正十四年（一九二五）
個人蔵・千葉市美術館寄託

本屏風は、前記展覧会「生誕135年 石井林響 千葉に出づる風雲児」終了後に存在が確認されたものである。林響没後の昭和三年（一九五七）の遺作展覧会に出品されて以後は未公開であった。

画中に「大正十四年歳次乙丑孟蘭盆節會為記念常在山妙徳寺三十三世／竹田日圭上人在殘檀徒斎藤壽氏寄進此屏風壹双而友人／林響石井毅三郎畫之」と記されている。大正十四年（一九二五）、千葉県東金市・妙徳寺の日圭上人に宛て、檀徒で林響の友人である斎藤壽の寄進により描かれたものである。日圭上人こと武田顕龍による林響の追悼文（武田顕龍「思ひ出のまま」『土筆』4・9 石井林響追悼号、昭和5年）にもこの屏風について触れられており、武田顕龍が住職として入った妙徳寺の大破した御堂営繕のための寄付勸募に刺激となるようにとの発願から無償で描かれたという。林響とは実家同士が親戚の間柄で父同士は「無二の酒友」であったが、本人との面識及び交遊は、この斎藤壽を介して大正十年頃から始まった。当時の林響は、千葉への移住を實行に移す頃である。「芸術も宗教も極致は同一帰着点に帰するというのが林響の持論でそれに共鳴した」という武田顕龍に、大網宮谷の地を選んで「これからは神仏と隣交際をして神を友とし仏と共に居る考えになって芸術に精進するのだ」と、移住の思想的背景を語るようなこともあったようだ。

いかにも林響画らしい表情の唐獅子や蝶がおおらかな筆で描かれ、牡丹は透明感のある美しい墨色でたらし込みを多用。朱色と白、二種の金色と色数を抑えて描いた清々しい画面となっている。現存が確認できる数少ない林響の屏風絵として貴重である。右隻には「林響（朱文方印）」と「其山楼」（白文長方印）「山骨」（白文長方印／関防印）が、左隻に「林響（朱文方印）」がある。

[Introducing material] Letters Relating to Ishii Rinkyō (Transcription and Commentary)

[Illustration] Ishii Rinkyō “Karajishi (Chinese Lion) and Peony Folding Screen”

Matsuo Tomoko

Ishii Rinkyō (1884-1930) was a Japanese-style painter born in Toke Hongō-chō of Yamabe District, Chiba Prefecture (present-day Chiba City) who entered the art world at an early age at the end of the Meiji Period, and was active into the early Shōwa Period. This paper transcribes letters, with some additional commentary, and attempts to reveal more about Ishii Rinkyō from the end of Meiji to the beginning of the Shōwa Period. A section of these letters from Ishii Rinkyō to Aihara Mokuhō (Kantarō) (Arai Ryokan collection) were introduced in the exhibition “Ishii Rinkyō: Leading Nihonga Artist from Chiba, 135 Years since his Birth” held November 23, 2018 through January 14, 2019, while letters from Yasuda Yukihiro to Ishii Rinkyō (Chiba City Museum of Art collection Ishii Rinkyō-related material, donated by Mr. Ishii Jun) are introduced here for the first time. Aihara Mokuhō was third-generation master of Shuzenji “Yōkikan Arai” opened in 1872, and was on close terms with many artists. He had deep ties with Rinkyō among them, acting as his marriage mediator, etc., and continued to support him throughout his life. There were numerous letters from Rinkyō and invitations to artist-patron meetings - even an announcement of Rinkyō’s sudden death - remaining in the possession of the Arai Ryokan.

I also introduce Ishii Rinkyō’s “Karajishi (Chinese Lion) and Peony Folding Screen” (private collection; in trust to CCMA) that was discovered after the forementioned exhibition. The artwork appeared once following his death at an exhibition of his posthumous work in 1931, but has not been on public view since. It was produced in 1925, from a request for something stimulating to raise funds for the repair of the damaged temple of Myōtokuji in Tōgane City, Chiba Prefecture, on behalf of chief priest Nikkei Syōnin, alias Takeda Kenryū. Rinkyō was in the process of moving to Chiba at that time, and it seems there were also things he told the chief priest of the ideological reason behind his move. The lion and butterfly are painted with a generous brush in an expression very reminiscent of Rinkyō’s work, and the peony is in beautiful transparent black ink using much of the technique of dripping into wet ink. It is a pure scene painted in colors limited to red, white and two types of gold, and is a valuable piece as one of the few extant folding screen paintings by Rinkyō that are known.

(Translated by Barbara Cross)

千葉市美術館研究紀要
採蓮 第二二号

二〇二〇年三月三〇日発行

編集・発行―財団法人千葉市教育振興財団

千葉市美術館

〒〇一〇〇三 千葉市中央区中央三一〇―八
電話 〇四三―二二一―二三一一(代)

翻訳協力―バーバラ・クロス

制作―era

Bulletin of Chiba City Museum of Art
Siren No.22

March 30, 2020

Edited and Published by
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba City, Chiba 260-0013 JAPAN
Phone. 043-221-2311

Translated by
Barbara Cross

Produced by
erA

ISSN 1343-148X